岩崎　純一　著

『岩崎純一全集』　第六十九巻「科学技術、産業（二の九）」

人間生活と科学技術、家政学、生活科学（九）
科学技術と社会問題・生活トラブル（二）
科学と常識、疑似科学、オカルト、魔術、運勢、風水、バイオリズム

編纂、監修　　岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

『岩崎純一全集』第六十九巻「科学技術、産業（二の九）」

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第六十九巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、科学と常識、疑似科学、オカルト、魔術、運勢、風水、バイオリズム等に関する述作を収める。

目次

巻頭言
第一編　〇歳～十九歳
第二編　二十歳～二十九歳
オーラは共感覚の一種か否か
私の見ているものが（テレビで言われるところの）オーラではないと思う最大の理由（共感覚と”いわゆる”オーラの決定的な違い）
第　部　岩崎純一が答える「共感覚 Q＆A」
第三編　三十歳～三十九歳
第一部　ご質問・ご相談や通報の例
第二部　優良な共感覚研究を実施していると認められる日本国内の研究機関・研究者等に関する最新報告書
第三部　共感覚の学術的定義を逸脱または拡大解釈した事業を展開する日本国内の団体・個人事業主等に関する最新報告書
第四部　共感覚の学術的定義を著しく逸脱した事業を展開する日本国内の団体・個人事業主等に関する最新報告書
第五部　活動内容が懸念される共感覚関連セラピー等の名称例の一覧
第六部　疑似科学にまつわる懸念　― 疑似科学ではない超音波知覚と疑似科学である動物駆除超音波装置を例に ―
第四編　四十歳～四十九歳
第五編　五十歳～五十九歳
第六編　六十歳～六十九歳
第七編　七十歳以降
第八編　著作者の一部および著作権者が岩崎純一であるもの
第九編　著作権者が岩崎純一であるもの

第二編　二十歳～二十九歳

オーラは共感覚の一種か否か

二〇〇七年六月十二日　起筆、擱筆、公開

「オーラも共感覚の一種ではないか」とは、よく言われることで、僕も色々と考えてはいるが、（世に溢れている安易な疑似科学を、自分の共感覚と同じ土俵に上げたくないという意味で、違うという結論を言いたいものの）まだ明確には分からないというのが、正直なところである。

むろん、世の科学者たちは、オーラなり超常現象を科学で説明しようと必死で、それはそれで安易な疑似科学の蔓延を防ぐためには必要で、僕も共感覚者として安心しているところではある。

僕も、人の姿や声に色が見えることは見えるが、どうしても心に引っ掛かりがある。と言うのが、「オーラが共感覚かどうか」を問うのは、要するに、唐突な例だけれど、「僕が見ているものが、あの江原啓之氏が見ているものと同じか」を問うのと同じことだからだ・・・などと言ってしまうと、なんだか面白おかしな、センセーショナルな話になるけれど、僕にとっては（きっと共感覚者の皆さんにとっても）真面目な問題であって、考え始めたら、深くてきりがないのだ。

http://hotwired.goo.ne.jp/news/technology/story/20050309301.html（VR もオーラも「共感覚」の一種？）

しかも、「オーラのほうが共感覚の一種」つまり「オーラ⊂共感覚（オーラは共感覚の真部分集合）」なのだから、オーラが見える霊能者よりも、僕ら共感覚者のほうが見えているものが多いという論調になってしまう。（図 A）（もちろん、「人に色を感じる」だけでなく、「文字に色を感じる」「音に色を感じる」という多種多様な知覚を含むのが共感覚なのだから、「オーラ⊃共感覚」はあり得ないだろう。）

図 A
070612a.jpg"

S：ヒトが潜在的に体験し得る全知覚

P：オーラ（を見る知覚）、霊能者のみが持つ知覚
Q：共感覚者の知覚

「共感覚では、同じ文字や音や人に見える色が人それぞれ違うのだから、もしオーラが共感覚なら、見る人によってオーラの色が変わることになっておかしい」という観点から、「オーラは共感覚ではない」（図 B）つまり、「オーラ∩共感覚は、空集合Φ」であることを説明しようとする人もいるけれど、ただ、霊能者やスピリチュアリストによって、一人の被鑑定者に対して言っていることがてんでバラバラなんてことは、テレビでもどこでもあるわけで、この観点のみでは、オーラが共感覚でないとは言えない。つまり、オーラは、被鑑定者側の何物かの客観的実在性によるものなどではなく、霊能者側の主観的・共感覚的クオリアである可能性が十二分にあると思う。

図 B
070612b.jpg

僕にとって、「音に色がある」「景色に音が浮かぶ」「人に色が見える」などは、超能力でも何でもなく、「ご飯を食べる」「寝る」のと同じく、現実的で日常的な体験なのであって、ずっと子どもの頃からそれを自然だと思って過ごしてきたから、今さらこれをオーラだと言われても、本当にそうなのかさえ分からない。

（ただ、これだけ長年、自分の共感覚と付き合ってきて、感動したり苦しめられたりしてきたのに、いきなり目の前にいる他人に向かって、「あなたの人生はバラ色でしょう」「あなたのオーラは汚い色だから、数年内に不幸が起こります」なんて言う気になるだろうかと考えたら、言う気にならない。だから、テレビであれだけのことを言うためには、僕が見ているもの以上に、もっと多くのものが目に見えていてほしいし、実際に見えているのだろうと期待するしかないと思うのだ。要するに、共感覚者という以前に、人として、そのことに期待している、としか言えないと思う。）

「オーラと共感覚に何かしら重なり合う部分がある」すなわち「P∩Q が存在する」可能性を残すなら、両者の関係は図 C のようになる。

図 C
070612c.jpg

ここでもし、一部の科学者が言うとおりに「オーラは共感覚の一種である」と見なして、かつ、「共感覚こそが、ヒトが本来、知覚しうる全クオリア（つまり、S＝Q）の集合である」

としてみる。さらに、全クオリアのうち、「共感覚者が体験しているようなクオリア」を持たない圧倒的多数の現代人のクオリア（つまり、個別の視覚・聴覚など）を R とすると、図 D のように、ヒトの知覚の全集合 S（＝Q）は、オーラを知覚する能力も、一般の人の視覚や聴覚も、全て包含することになる。（S’は、ヒトが持ち得ないクオリア、すなわち、超音波を感知する能力・赤外線を見る能力などの、他の動物のクオリアで、我々ヒトのクオリアの外にある。）

もし今後、共感覚が科学的に解明されていけば、R は人類史的に見て極めて Q と S に近い、豊かなものであったと認められる日が来るだろうとは、僕も思っているが、そうなると逆に、P の立場もそれだけ危うくなり、図 D のように Q の中に取り込まれてしまうか、あるいは最初からいわゆる疑似科学・オカルトとして、この図に描くべきものではないことになる。

図 D
070612d.jpg

R：ある時代の大多数の人間の知覚の共時態（オーラを見る知覚能力も共感覚も持たない、意識に上らない人の知覚）

いずれにしても、ただ一つ確実に成り立つと思うのは、「R⊂Q」であり、図 A～C においても、R は、P を除く Q 内のどこかに真部分集合として位置しているはずだ。そして、R の占める範囲は、だんだんと矮小化していて、あとはこの図から P を消すべきか、あるいは P を Q の中にこそ描きこむべきか、というのが、僕の考え・これまでに書いてきたことだということになりそうだ。

（例えば、昔の日本人の知覚の共時態の集合 R は、今よりもっと Q に近かったであろう。ところが、一般の人々の知覚を超える（とされる）霊能者はいつの時代も存在したのだから、P と R は「いつの時代も重ならないけれども、両者ともに Q に包含される」ことになる。）

共感覚が、超常現象でも何でもない、現実体験である以上、図 D の冷静・明確な考え方は、僕ら共感覚者の心を救うということは言えそうだけれど、ともかく、そもそも P というものが、本当にこの図に描かれるようなものなのかどうか、僕ら共感覚者は、自分の知覚と、世の霊能者や宗教家の言っていることとを、冷静に比べながら、考えていくべきだろう。

私の見ているものが（テレビで言われるところの）オーラではないと思う最大の理由（共感覚と”いわゆる”オーラの決定的な違い）

2008 年 2 月 24 日　起筆、擱筆、公開

共感覚とオーラとが同じものだと主張する科学者はいるようだし、私に「純一さんはオーラが見えるんですか？」というメールが来ることがある。私なりに私の共感覚について感じていることを書いてみようと思う。私は、科学で説明できないことはあると思うけれども、それを考慮した上で少し書いてみたい。（図の緑や桃の絵は、私がある人を見たときに感覚しているものです。）

唐突だけれども、私は血液型占いなど、巷で流布している数々の占いなどを一切信じないほうである。血液型占いとは、A 型が几帳面だとか、B 型の男は部屋が汚いとか、AB 型は天才だとかいう、あれのことなのだが、共感覚とそれらの流行とは、受け取り手によっては簡単に結び付くので、非常に困難を感じる。（私はまさに B 型の男で、血液型占いでは散々な結果になるのだが、とにかく冷静に述べてみる。）

私がなぜ今の血液型占いを信じないかと言えば、一つには、血液型占いというものが、人間の血液を「ABO」で分けたり「Rh」で分けたりする方法のうちの一つの分類方式のことを言っているのであって、しかも医療の現場では「Rh」の違いは「ABO」と同じくらいに重要なのであり、どうして国民レベルで「ABO による性格分析」がブームになるのかが疑問であるということがある。それに、もはや国民レベルでこの占いを信じているのは、たぶん世界中で日本人だけであって、あとはおそらく韓国や台湾の人の一部が信じているくらいではないだろうか。と、理由を挙げていったらきりがないけれど。

私は、血液の構造がその人の性格に何の影響を与えないと言っているのではない。私の考えとしては、もし「ABO」の違いが性格に影響することを信じるのであれば、「科学として

同じミクロレベルにあることが全て性格に影響を与える」ことを信じなければならない。例えば、「色盲の人は性格がどうだ」とか、「黒人の性格は強暴だが、白人は知能的・文明的性格である」とか、「ソ連 A 型インフルエンザにかかった人は天才肌だが、香港 A 型は大雑把な性格だ」などということまで信じていなければならなくなる。もし「私の血液は赤色だが、あなたの血液は青色である」というような違いがあるのであれば、それは確かに、いわゆる生物学的な種の違いほどの性格の違いを生まないはずはないと私も思うが、輸血や出産の安全性においてこそ適切に知っていなければならない「ABO 式血液型」であるにしても、それが「A 型は几帳面で、B 型は乱暴で奔放だ」というような結論さえ生んでしまい、テレビでも簡単に取り上げられるこの国民性は、いったい何なのであろうか。

私が、自分の共感覚と巷で流行しているオーラとが別物だと思う理由は、たくさんあるのだが、最大のものを一つ挙げるとすれば、「他人の幸・不幸」を語るかどうか、「他人の生命や私生活」に介入するかどうかの違いによる。

例えば、私の場合、前回の記事に書いた感覚では、「女性の生理現象が共感覚で分かることがある」、つまり、ただ「分かる」「見える」というそのことを述べているだけである。他の「音に色が見える」「文字に色が見える」などの共感覚も同様である。ただひたすら「見える」「聞こえる」「分かる」という、私の現実を述べて、それで完結している。

ところが、テレビでやっているオーラ関連の番組や、色々な占い関連などを見ていると、「このオーラが見えるから、あなたは将来どうなるでしょう」とか、「この色があるから、事故に気を付けたほうがいいでしょう」ということを言っている。「見える」「聞こえる」という感覚のことではなく、「見えるからどうだ」「聞こえるからどうだ」、つまり完全に「未来予測」、しかも「他人の生命や私生活の行く末」のことに言及する。血液型占いでも、「B 型の男は乱雑だ」ということまで言ってしまう。一方、私が言っていること、感覚していることは、完全に「直前の過去」のこと、つまり、今しがた見た文字や聞いた音がどうか、ということであって、それで完結している。

ここではとりあえず、オーラが実在するか、という議論は置いておくにしても、霊能者が言う「あなたは今年中に結婚するでしょう」ということを科学的に「過去の現象」として説明するには、相手の人が結婚したいと思ったその意志の動き、脳細胞のはたらき、筋肉の動き、今後の予定などを片っ端から霊能者が「今現在すでに見て」いなければならない。ところが、私が「音に色がある」と言っているのは、あくまで「今見た音が何色だ」という「直前・直近の過去」だけで、説明しようと思えば説明できる。つまり、私の感覚は、「光の速度が秒速 30 万キロメートル」だとか「人間の目には赤外線は見えない」とか「人間は犬よりも嗅覚が弱い」という事実から一切はみ出ない。

私が「人にその人固有の色が見える」、「人にその人固有の音が聞こえる」と言うのは、「見える」「聞こえる」と言っているだけなのに対し、いわゆる霊能者は「赤の他人の幸・不幸」、「赤の他人の私生活」までを語ってしまう。しかも、「こうすれば幸せになりますよ」、「ここ数年であなたは結婚しますよ」ということまで「見える」と言うのだから、そこでもう決定的に私の共感覚とは違う。こういう感覚は、私には全くない。

オーラを本当だと信じるかは人それぞれだろうし、そもそも、相手の言う「オーラ」が、未来予測のことを言っているのか、他人の幸せがどうだということを言っているのか、巷で問題視されているオカルト的なことを言っているのか、私が信じているような「以心伝心」や「虫の知らせ」や「心の通い合い」、「霊性」や「無」や「空」や「禅の境地」や「幽玄」や「惻隠の心」のことを言っているのか、そこから問わねばならないように思う。そのあたりは、もはや私の意見するところではないが、ただ一つ言いたいのは、私の共感覚は、ただ私の感覚を述べてそれで完結しているのであって、私がその人に何かを「見た」からと言って、その相手が明日どうなるか、幸せになるか、億万長者になるか、いつ結婚するか、事故に遭うか、恋人が見つかるか、成績が上がるか、というようなことは、私には見えも聞こえもしない。見えも聞こえもしないというところに、かえって人間がその時々を生きることの大切さを感じるということは、もちろんある。

まだ知らないが、もし霊能者の中にオーラと共感覚とを同一視する人がいたら、私はその霊能者の能力を疑うことだけは確かだと思う。共感覚は、他人が将来どうなるか、他人の私生活がどうか、というようなことには、一切介入しないし、できないからである。

しかし、難しいもので、共感覚を信じないのに血液型占いを信じる人もいるわけだし、両方を信じる人もいるし、私のように共感覚が現実であって血液型占いなど信用しないという人もいる。私の周りにいる共感覚者の皆さんは、確かに私と同じような考え（考えと言うよりは、体験がそうだから、そうなるのだが）を持っているけれども、共感覚が現実のものであるということが人に理解されるかどうかは、もはや共感覚者側の説得力とは無関係であって、もっぱら受け取り手の姿勢や考えに左右されるところが皮肉である。

「見える」ということが共感覚にとっては全てなのであって、「見えるから、ゆえに、かくかくしかじかである」ということを、共感覚は語らない。本当にそういうことが分からないから、言えないといったほうがいい。今やブームになっているオーラが本物かどうか、それは私の意見するところではないと思う。ただし、「私が感覚する以上のことは、何も見えない」ということにより、私の共感覚と巷で流行のオーラとが完全に別物で、別の価値観のことを言っているものであることを知るのみである。それ以上のことは、ちょっと私

には解決の術がない。だから、共感覚と、テレビで扱われているようなオーラとを、同じものであるとして議論を進めているような「自称共感覚者」がいたら、その人が言っていることはやはり誤りであると見なければ不適切ではなかろうか。

「純一さんの見ている世界とテレビに出ている霊能者さんの見ている世界が同じだなんて、すてきだ」などと言われることがあるが、そのようなことは私の知る範囲ではないと思う。こういういわば短絡的な思考のあり方が、共感覚に関心を持つ日本人に限らず、今の日本人の大半を占めるという現実が、実に情けなくも滑稽でもあり、距離を置きたいと感じる日々である。私が言いたいのは、オーラを見る霊能者を信じるか信じないかという以前に、共感覚と、芸能人や他人の私生活に介入するオーラとを同一視する人は、すでに共感覚を正しく温かく理解していないということである。

最も難しいのは、「純一さんは共感覚があるんですよね？　だったら、オーラが見えるんですか？」という直接的な質問にどう答えるべきかということである。礼儀という以前に、回答不能なものを回答することはできないから、回答せずに置いておくしか方法がない。こういう場合は、「共感覚者はオーラが見えるものだ」ということを、絶対的に決まった事実だと思って問うてきているのだから、「見えません」と正直に答えると、その人にとっては共感覚そのものが非現実の空想の産物になるわけである。

私は確かに、哲学書や仏教書や禅の書物などはよく読むけれど、これからもあくまでそういったことと共感覚との関連を、冷静に追究したいと思う。共感覚とオーラとが同じものであると主張する科学者がいるが、もし本当に同じであれば、（共感覚者には「他人の幸・不幸」は分からないのだから、）テレビの霊能者が言っていることが本当か、という議論になってくる。ひとまず、そういうこととは距離を置いていきたいのが私であるし、今のところは共感覚とオーラとは全く別物であると思う、とだけ言っておくことにしたい。

私の主張（と言うよりは実体験からの結論）を一言で言うならば、「昨今のテレビで言うところのスピリチュアル世界・霊能の世界が”他人の私生活”を語っている限り、今後とも私の共感覚とそれらが相容れることはないだろう」ということだと思う。

（追伸・・・気になって調べたけれど、やはり血液型占いを信じているのは、今の日本人と、韓国などの一部だけとのことであった。ちなみに、日本は戦時中、大学教授から国の高官までが血液型占いを信じ、A 型であるヒトラーやムッソリーニに倣い、A 型の軍人を多く採用したことは、比較的よく知られている。こういった血液型性格診断は、当時の新聞や雑誌にも大々的に取り上げられていた。このあたりからすでに、今の日本人のスピリチュアル観の浅はかさは始まっていると私は思う。）

第　部　岩崎純一が答える「共感覚 Q＆A」

2012 年 7 月 23 日　起筆
2012 年 8 月 18 日　公開
2017 年 9 月 25 日　最終更新
（2018 年 7 月 14 日追記：現在、岩崎の旧サイトの内容は『全集』に収録。）

私はこれまでに、約 1000 名の方々から共感覚に関するご質問・ご相談をこのサイトを通じて頂き、約 300 名の共感覚者の方々および約 50 名の共感覚の研究者・関係者の方々と面識を持ってきました。

このページには、皆様から頂いた共感覚に関するご質問・ご相談のうち、良くも悪くも私の印象に残ったものと、私からの回答を掲載しています。
（ご質問本文の掲載は、許可が得られた場合のみです。）

他の共感覚サイト（大学の共感覚研究サイトなど）ではあり得ないような（把握していても載せられないような）性質のご意見、極めて奇抜に見えながら実は昨今の日本の社会問題を反映しているご意見を、積極的に取り上げています。

日本の大学の共感覚研究は、非常に綺麗な内容のものばかりです。「綺麗な内容」というのは、「共感覚という個性を大切にしよう」、「子供の共感覚を見守ろう」といった文言が前面に押し出され、社会の闇やタブーについての研究や言及が存在しないという意味です。その意味では、私の共感覚研究は、この「共感覚 Q＆A」に限らず、綺麗でないものを多々含んでいると思います。

この「共感覚 Q＆A」は特に、日本におけるいわば「共感覚疎外」の現状を正直に露にするために設けました。ここで言う「疎外」とは、当然マルクスになぞらえた使い方であり、「少数派である共感覚者が置かれた」現状のみならず、「少数派であったはずの共感覚者が今や誰かを苦しめる側に立っていることに気づかない」現状をも、私なりに指しています。

個人名は、適宜「あなた」などに直してあります。原文としてはお一人ずつに別々の文章でお答えしておりますが、このページでは、類似のご質問を併記し、全般的な回答になるように若干文章を追記しました。

【ご質問（共感覚研究に関するもの）】
共感覚者は女性に多いのですか？
【私からの回答】

【ご質問（共感覚研究に関するもの）】
「色聴」という言葉は間違っていませんか？
（「色聴」と「音視」は逆ではないのでしょうか？）
【私からの回答】

【ご質問（共感覚と心の問題に関するもの）】
共感覚をシャットダウンしたくて仕方ないです。アドバイスいただけますか？
【私からの回答】

【ご質問（共感覚と心の問題に関するもの）】
私は統合失調症ですが、共感覚者とも言えますか？
（私は精神疾患ですが、共感覚者とも言えますか？）
（私は強迫性障害を診断されましたが、共感覚との違いが分かりません。教えていただけますか？）
（私は解離性同一性障害の女性ですが、私の見ている世界は共感覚でもある気がします。違うのでしょうか？）
（私はアスペルガー症候群ですが、共感覚も持っている気がします。判断に自信がないので、アドバイスいただけますか？）
【私からの回答】

【ご質問（共感覚と心の問題に関するもの）】
共感覚は「感受性」や「心の悩み」と関係ありますか？
（私の共感覚は私の鬱々とした性格と関係があるという思いは誤っているでしょうか？）
（共感覚は本当に「感動」・「感情」といった心の動きと関係なくて、「知覚」・「認知」の分野なのでしょうか？
（共感覚者には、心が感じやすい人が多いですか？）
（私は自分を過剰に「傷つきやすい人間」と感じて悩んでいます。それは何か共感覚に関係していますか？）
（私はこの世を生きにくいと感じていますが、私の共感覚と関係がありますか？）
【私からの回答】

【ご質問（共感覚・共感覚者を非難するもの）】
岩崎さんの共感覚は、危険ドラッグとか覚せい剤とか、何かヘンな薬物をやっているか、文字に適当に色を塗って妄想世界を創り上げているか、どちらかなのでは？
【私からの回答】

【ご質問（共感覚・共感覚者を非難するもの）】
共感覚は本当に実在するのですか？
（共感覚者を自称する職場の同僚を信用してもよろしいでしょうか？）
（共感覚は、「人に話を聞いてもらいたい」というわがままによる虚言ではないでしょうか？）
【私からの回答】

【ご質問（共感覚・共感覚者を非難するもの）】
部下の共感覚者が鬱陶しいです。指導するにあたり、アドバイスをいただけますか？
（共感覚や学習障害を社会に持ち込む人をどうにかしてほしいです。）
（世の中はなぜ共感覚ごときで個性だ個性だと騒ぐのですか？）
（ほとんどの共感覚者は、実際は大したことのない感覚しか持っていないのでは？）
【私からの回答】

【ご質問（共感覚ビジネスに関するもの）】
岩崎さまも私の共感覚セラピーに参加して、人生のレベルアップをしませんか？
（岩崎様も、共感覚や「気」を操ることのできる選ばれし人間として、世のため人のために働き、多くの人々を救済しませんか？）
【私からの回答】

【ご質問（共感覚研究に関するもの）】
共感覚者は女性に多いのですか？

類似のご質問を数名の方から頂きました。うち、掲載許可を下さった一名様の例を挙げています。

岩崎先生

共感覚者は、女性に多いのでしょうか？
まず、共感覚者が何人に一人なのか、いろんな論文があってはっきりしません。
2 万人に一人なのか、20 人に一人なのかさえも、よくわかりません。
そのうえで、女性が男性の 20 倍くらいいるデータがあったり、男女同数だとするデータもあります。
はっきり 1 対 1 と書いてある日本の大学のサイトも見てきました。

岩崎先生は、どれが一番本当だとお思いですか？
どれが一番信じられるデータなのでしょうか。

【私からの回答】

このことは、時々話題になりますね。私の見解を申し上げますね。
結論から申し上げますと、「現代の日本の言語障害がない定型発達の（独力で共感覚を報告できる）成人においては、女性のほうが多い」というのが私の見解（と申しますか、調査結果）です。詳細はここには書ききれないので、サイト・ブログ・拙著や以下のデータなどをご参照いただければと思いますが、一通り説明しておきますね。
まず、本来、論文・研究データというものは「私情」を入れずに扱うべきものです。しかし、残念ながら、必ずその同時代の風潮・ブーム・世論に左右されていることが多いと感じます。共感覚のみならず、私がサイトで扱っている解離性障害や統合失調症や不安障害などの論文でもそうなのですが、「昔は女性ばかりの感覚や症状と思われていたが、男性にも同等に存在することが分かった」というニュアンスが入っている論文が増えてきています。
これは、データの正確な分析の結果というより、一つの風潮だと思います。私なら、まずこういう論文から順番に疑ってかかってしまいます。
もう何度もあちこちで書いてきたことなのですが、「共感覚者は男女のどちらに多いか」という疑問自体は、本来は学術的に何の意味もないと考えます。「成人になっても文字や音に色が見える感覚のこと」を「共感覚」と定義すれば、共感覚者の数は少なくなりますし、「誕生以降のどこかの時点で文字や音に色を感じたことのある全世代の人間の感覚のこと」をそう定義すれば、多くの人が共感覚者であることになります。
執筆者が「共感覚者」の語をどの世代のどのような言語能力保持者に対して用いているかを解説していない論文の場合、「共感覚者」の語は、何を指しているかが分からないわけですから、読解することができなくなってしまいます。
そうである以上、あなたのご質問も、本当はもっと厳密に成されなければ、答えが存在しないという気はします。ここでは、「共感覚者は、現代の日本の言語障害がない定型発達の成人において男性よりも女性に多いですか？」と聞かれたとしますね。
そうだとしますと、これを私が調べた結果を、以下に載せています。特に「男女年齢別」の箇所をご覧下さい。

「岩崎純一のウェブサイト」へのご訪問者の統計（1）（PDF）

今の質問に対する答えは、「女性のほうにかなり多い」となりますね。
一方で、幼少期の男女や言語障害者の男女を含めた上で比較すると、「男女に差はない」

が答えになります。

その上のほうに、言語障害・発達障害・解離性障害との関連を調べたデータも掲載しています。

さて、今は純粋にデータ上のお話をしてみました。次に実体験上のエピソードを申し上げますと、私はいくつかの共感覚者サークル・集いに参加していますが、現在、男性は私だけなのです。以前は、男性もいたのですが、だんだん来て下さらなくなりました。他の共感覚サークルでも、男性はあまりいないそうです。

生理学的定義の共感覚を持っているか否かという以前に、共感覚や自分の心の悩みをどうしても人に話したくなる（いわゆる「女子会」などでおしゃべりしたくなる）心境が優先的に女性において起きるために、女性の共感覚者の存在のほうが知られやすい、ということが「経験から」得られていることになると思っています。そのような心境や欲求は、女性のわがままではなく、女性の本能・母性本能のようなものなのだと思います。他人への依存に陥らない限り、健康なものだと思います。

つまり、結論としては、次のようなことです。「共感覚を言語によって自力で報告できない言語障害者・発達障害者は男性に多い」こと、「共感覚を言語によって自力で報告できる年代になるまでに、男性のほうが優先的に共感覚を失う」こと、「これらの理由により、そもそも“共感覚者”の自助コミュニティが成人女性ばかりで構成されることになるが、女性ばかりで形成されたその場の空気に共感覚者男性がうち解けられず、いっそう共感覚者男性が表に出なくなる」こと、などが、私の調べたデータと私の経験の双方から確認できる、ということです。

それから、確かに、日本の大学の研究者・学生が主催するネット上の共感覚実験も多くあり、千人以上のデータを公開していますが、ここから得られる結論は、「ネットができる環境にあり、かつ定型発達で言語障害がないがためにネットの文章を読解することが可能であり、かつネット上でおこなうタイプの実験に参加する意志を有する、大学生を中心とする日本人のうち、共感覚を有する者を調査したところ、男女差が小さいことが分かった」ということであって、そこから「男女で共感覚者数がほぼ 1 対 1 であった」という見解は出てこないはずです。

私の結論としては、そういうことです。

【ご質問（共感覚研究に関するもの）】
「色聴」という言葉は間違っていませんか？
（「色聴」と「音視」は逆ではないのでしょうか？）

類似のご質問を数名の方から頂きました。うち、掲載許可を下さった一名様の例を挙げています。

岩崎純一さま

岩崎さまにお聞きしたいことがあります。
私は前々から「色聴」という言葉に違和感を感じています。それは、日本語としておかしいのではないかと思うからです。
まわりの友人にも聞いて回ってみたのですが、だれもほとんど興味がないようで、今理解者がいない状態です。でも、もし私の疑問が正しくて、言葉のほうが間違っていたら、どうしても直したい、直ったらいいのにと思ってしまうのですが、自信がありません。
ただ、よくよく見てみると、やっぱり滑稽な間違いなのではないかと思うのです。「色聴き」として「いろぎき」と読むと、これはもともとの日本語なので、正しい感じがするのですが、「しきちょう」や「しょくちょう」と読むと、ひっくり返して「聴色」にしないとおかしいのではないかと思うのです。
それに、「音視」という言葉も見かけますが、今「色聴」と言われているものが「音視」という気がします。「音に色を視ている」からです。
岩崎さまはどうお考えか、よろしければ教えていただけますでしょうか？

【私からの回答】

結論から申しますと、あなたの疑問は極めて正しいものだと思います。かなり鋭いご質問・ご提案です。
あなたと同じ疑問をブログにお書きになっている方もいらっしゃいます。（以下参照。）

（【共感覚】「色聴」と「音視」って逆じゃない？ http://readysg.blog71.fc2.com/blog-entry-694.html）

日本人は、歴史上、様々な西洋語圏からの輸入概念を漢字塾語によって表してきましたが、おっしゃるとおり、「色聴」・「音視」は、日本語としては誤りであると言えます。非常に鋭いご指摘で、感心致しました。
本来ならば、「色を聴く」ということ一つ取っても、「聴色（ちょうしき・ちょうしょく）」でなければならず、さらにそもそも、英語圏の共感覚研究においては「colored-hearing」が「音の色を聴く」共感覚ではなく「音に色を視る」共感覚を表している、すなわち「see colored-hearing」であり、「hear color」ではないのであって、正しい翻訳は「視音」であることになります。
上記の方のブログにある「漢字を借りて西洋語を日本語に翻訳する場合の六大規則」、すなわち、同義の字の連続、対義の字の連続、修飾・被修飾関係、動詞・目的語（補語）関

係、主述関係、上の字による下の字の打ち消しは、古くは漢文訓読の頃から意識されてきたもので、1500 年近くの歴史を持ちます。

この造語法は、明治の文明開化に伴う漢字熟語の大量生産期にも、漢語（漢文）をもとにして福澤諭吉や夏目漱石ら「造語の名人」を中心に試されました。今日まで綿々と受け継がれてきた国語の基本であり、「日本人の知恵」と言えます。

これは、一般の欧州語と同じくいわゆる SVO 類型に属する漢語（中国語）に倣った非常に便利な造語・統語法であって、漢字を用いて西洋語を日本語に翻訳する際には必ず意識されているべきものだと言えます。

「もともとの日本語」とおっしゃっているものは、「やまとことば」と呼ばれるものです。この場合、SOV 類型ですから、おっしゃるように「色聴き（いろぎき）」という造語はあり得ます。むしろ、「いろぎき」や「音視（おとみ）」という新語を提唱してみてはいかがでしょうか。「おとづれ」や「おとなひ」といった語につながる、大変に美しい発想かと思います。

そこまで考えますと、現在の「色聴」や「音視」という熟語が持つ二重の誤り（熟語構成の誤り、「color、hear」の意味と主述関係の解釈の誤り）は、看過しがたいものだと言えます。

ただ、一言で言いますと、今から修正をかけていくことは、極めて難しいのではないかと思います。

また、「使い慣れた（誤りが指摘されずに普及した）ものを間違いだと言えるか」という、よくある反論が待ち受けています。東大や京大の研究者が採用している用語ですから、それを模倣して使用している一般の共感覚者を批判するのは、少々お門違いとも言えそうです。

そもそも共感覚研究者が、若年期に学習したそういう統語規則を覚えていたり、漢文や国語学・日本語学を勉強していたりするとは限らないわけです。「色聴」や「音視」のどこに違和感があるのかが分からない日本の研究者がほとんどだと思います。実際にそうおっしゃった研究者も、私の周りにいらっしゃいます。また、そういう状況だからこそ、「色聴」という語が生まれてしまったのだと思います。

先の統語規則（syntax・シンタックス）は、共感覚用語に限らず、日本の医学用語・物理学用語・化学用語の増産に伴い、昨今はしばしば破られつつあります。一番の原因は、日本の知識人・教員層が漢文を嗜まなくなったことにあると言えますが、現在は英語（米語）一辺倒の風潮にありますから、どうにも路線変更自体が不可能になってきていると思います。

心理学・神経科学などの本で、共感覚が紹介されているページなどでは、これら「色聴」・「音視」の語が普通に使われていますし、外国の研究者に対しても「シキチョー」・「オンシ」という発音で紹介されている状況です。日本の「色聴」の専門家の方々も、「色聴」の語によって研究・サイトを展開していらっしゃる状況です。

私は、自分のサイトでは「色聴」や「音視」という語の使用を意図的に避けていますし、使うとしても、文脈上仕方のない時に限っています。ただし、被験者として研究・実験・論文などに参加する時には、一人だけ違うことを言っても学術的に認められないわけですし、仕方なく「色聴」や「音視」を使っています。もちろん、不満は感じています。

そういうわけで、結論としては、「まず自分が分かっているということが重要で、理解者が少しいてくれれば嬉しい。でも、日本の共感覚研究界全体に修正を求めることはすでに難しい」といったところではないでしょうか。

すでに「聴色感覚」・「サウンドカラー共感覚」（上記のブログ執筆者のご提案）などの新語に変更することが難しい段階まで来ているような気がしますが、私のほうで機会があれば、「共感覚のような、新たな分野を開拓するときには、日本語の使い方、翻訳の仕方にも目を向けてみたらどうだろうか」と、色々な先生方に申し上げておきます。

ちなみに私は、「女性の生理現象に色が付いて見える」自分の共感覚を、自分で「対女性共感覚」と名付けました。これは、「女性に対する共感覚」であって、先の統語規則（シンタックス）から見ても、この語順しかあり得ないことになります。「対人」・「対空」といった語と同じ造語法で、「対」の下に来る語が補語となります。もちろん、「ペア」の意で「対（つい）」と読む場合には、これに続く語は被修飾語です。

【ご質問（共感覚と心の問題に関するもの）】
共感覚をシャットダウンしたくて仕方ないです。アドバイスいただけますか？

類似のご質問を数名の方から頂きました。うち、掲載許可を下さった一名様の例を挙げています。

岩崎純一先生

私は、とても強い共感覚を持っているという自覚があります。
正直辛いところがあります。
共感覚のシャットダウンの方法を教えていただけますでしょうか。
私は人の感情を、色、形、匂い、味などで感じてしまいます。
日常生活で工夫や対策は色々取り入れていますし、文字の色、形、匂い、味は辛くないのですが、人の感情や人間関係だけは強い色、形、匂い、味として入ってくるので、防ぎようがないのが現状です。
よろしくお願いします。

【私からの回答】

かなり単純に、「シャットダウンする方法があるかないか」の二者択一で言いますと、残念ながら、ないと思います。私にとっても、やはり、ないですね。

それは、唐突な話になりますが、血流をシャットダウンしたり、視力をシャットダウンしたりする方法が、何らかの事故や「死」以外にあり得ないのと同じことだと思います。ご経験上、きっと分かっていらっしゃるとは思いますけれど。

よほど年を経るに連れて共感覚が薄れている人でない限り、共感覚のシャットダウンは、正確には「死」によってのみ訪れることになると思います。生きている中での苦労や他人との感情のやり取りが終焉する、シャットダウンされるというのは、基本的にはそういうことだと思うのです。

もちろん、他のことに集中することで共感覚を気にしなくなる、などの対策はあるでしょうが、それは非常によくある俗的・処世訓的なアドバイスで、日々の生活の中で完全にシャットダウンする方法は私も知りません。

大切なのは、ご自身の共感覚そのものをシャットダウンしたいのか、共感覚を理解してくれない周囲の人たちや風評をシャットダウンしたいのか、ご自身で理解することだと思います。むしろ、後者のご相談のほうが多いので、一応書いておきますね。

共感覚そのものがシャットダウンしたいほど強烈で苦痛なのであれば、第三者による手助けや専門の医者による診断が必要な場合が出てくるかと思います。

実際に、日常生活に困っている知人の共感覚者が病院に行かれたのですが、精神科・心療内科を勧められていました。しかしそれは、医者が間違っているわけではないとも思います。共感覚が元で、強迫性障害や気分障害の名で精神疾患を診断されることがあります。（詳しくは、私のサイトの精神疾患関連のページや、別のご質問への私の回答をご覧下さい。）

周囲の人たちの無理解をシャットダウンしたいのであれば、それはどうしても、我々共感覚者が自分たちでそれぞれの事情に合わせて考え、対応するしかないと思うのです。無理解に反応したくなければしなければよいと思いますし、何か反論したければ反論すればよいとも思います。どちらが正しいということもないと思いますし、どちらも一生懸命にやっていることであれば、それでよいと思います。

【ご質問（共感覚と心の問題に関するもの）】

私は統合失調症ですが、共感覚者とも言えますか？

（私は精神疾患ですが、共感覚者とも言えますか？）

（私は強迫性障害を診断されましたが、共感覚との違いが分かりません。教えていただけますか？）

（私は解離性同一性障害の女性ですが、私の見ている世界は共感覚でもある気がします。

違うのでしょうか？）
（私はアスペルガー症候群ですが、共感覚も持っている気がします。判断に自信がないので、アドバイスいただけますか？）

類似のご質問を数名の方から頂きました。うち、掲載許可を下さった統合失調症の方の例を挙げています。具体的な疾患名を適宜「精神疾患全般」と読み替えても、私の主張は変わりません。）

岩崎純一様

私は統合失調症です。今はあまり症状は出なくなりました。
統合失調症は、共感覚と違って本当の幻覚が見える病気ということになっているのですが、共感覚的なところもあると感じてきたので、ご相談させていただきました。
精神科の主治医に、「文字に色が見える」、「音に色を感じる」、「匂いに色が見える」などと言ったところ、難しい顔をされました。
統合失調症になったのは、ずいぶんあとですが、共感覚のほうが幼いころから起きていました。
共感覚で見た文字の色などを描いて精神科に持って行ったところ、主治医が困っていたので、幻覚だと思われなければいいなと思っていました。
でも、それは「共感覚は幻覚とは違う」という意味ではあっても、私の中では共感覚と統合失調症は精神の活動として素直に似ていると思うのです。
主治医には理解されている感じがないので、とても寂しく思っています。
また、むしろ共感覚者のほうが、「共感覚を精神疾患と一緒にしないでほしい」と言っているので、正直苦しいです。
私の思いは、共感覚者を病気扱いするのとも違います。
だれか私のことをわかってくれる人にいて欲しいです。
もし、何かわかることがありましたら、教えてください。

【私からの回答】

感想を素直に申し上げますと、あなたのおっしゃることは、私から見れば真っ当だと思えます。私の中でも、「共感覚者が見ている“知覚”としての文字や人の色と、統合失調症者が見ている“幻覚”としての文字や人の色とは、現象名としては別物であること」と、「共感覚と統合失調症（などの精神疾患）とは深い関係にあるという主張」とは、何ら矛盾しないと感じられています。
逆に、「共感覚は精神活動・心の問題とは関係がない。一緒にされると困る」と主張する

方々は、医者だけでなく、共感覚者当人にもいらっしゃいますが、これは単にこれらの方々があなたのような方ではないということ、つまり、全く精神疾患に陥ることのない軽度の共感覚のみを持っているために病院にかかる必要がない方々であるということのみを意味するのであって、「精神病理学の観点において、共感覚と精神疾患・精神活動との関係の深さの探究に意味がない」ということにはならないと思います。

それに、そもそも共感覚と統合失調症（や各種の精神疾患）を併発している人を、私は何人か知っています。むろん、ここで言う精神疾患とは、ICD や DSM などに記載されている精神疾患のことです。

確かに、あなたの主治医のように、共感覚や統合失調症そのものを理解できていない（しようとしない）医療従事者も多いと感じます。ただ、共感覚と統合失調症の深い関係、共感覚者と統合失調症者の知覚・認知の仕方の共通点を直観的に分かっている方も、いらっしゃると思います。

全てが医者の診断ミスと言えないことも確かだと思います。共感覚と統合失調症の両方に理解のある医者であっても、「診断」というのは「分類すること」ですから、どれかの診断名に患者の症状を落とし込まなければなりません。

おそらく共感覚と統合失調症は、それらの脳における発生原理・機構において区別が曖昧な領域を有しており、「知覚の側面」から名付けるか、「精神病理の側面」から名付けるかで、医者によって判断が変わってくるのだと思います。ただし、医者が共感覚を知らない場合は、医者としての能力というよりは、単なる知識不足の問題である可能性もあるわけので、こちらから真摯に伝える努力をすることにはなりますが。

つまり、あなたという一人の人間の、或る側面に「共感覚」、別の或る側面に「統合失調症」という名が付いているということだと思うのです。

あなたのように、共感覚と統合失調症（精神疾患・精神活動）の近さを直観できている人は、あまりに共感覚が強度であり、共感覚の最も精神障害に近縁の領域を見ているということが言えると思います。

例を挙げておきます。まず、あなたと同じように、幼少期に共感覚を経験し、のちに統合失調症と診断された男性の映像です。人の命よりも利益を優先する会社・上司の姿勢に違和感を覚え、それに反論しているうちに「殺すぞ」と言われて、統合失調症を発症しています。

私の統合失調症を語ろう

それから、共感覚と精神疾患が同一の人間に生じているケースは、統合失調症者に限りません。以下は、私が出会った二人の解離性同一性障害の女性の例です。つらい虐待被害体験によって共感覚が蘇った女性です。主治医や他の共感覚者に対してあなたと同じような疑問を持ってきた方々です。

解離性同一性障害において見られる共感覚

また、幼少期に文字を自分の好きな共感覚色に塗ったところ、母親に怒られてそれがトラウマとなり、それ以来、自分の共感覚色で描かれた文字を街中で見ただけで誰かに怒られるのではないかと警戒するようになり、「強迫性障害」を診断された女性がいらっしゃいます。主治医が共感覚を知らなかったのですが、「数字の 4 や 9 や 13 を不吉と感じる」タイプの強迫性障害と同等と見たのでしょう。

アスペルガー症候群についても、同じことだと思います。或る一人の人間の、或る側面に「アスペルガー症候群」、或る側面に「共感覚」という名が付いているということだと思います。

ただし、あえて申し上げてみますと、あなたのような方が注意したほうがよい点もあると思います。

特に、これは病院をハシゴする習癖のある女性の方に多いのですが、病院・医者を変えるたびに診断名と薬が変わっているような方の場合、精神疾患のさらなる悪化と薬の乱用・後遺症のほうが要注意だと思います。病院をハシゴし、薬をとっかえひっかえしすぎて、最後は何が何だか分からなくなったという人もいます。要するに、この人は、病院に行く前のほうが健康で、精神疾患ではなかったわけなのです。

ちなみに、統合失調症は今でも、日本の入院患者数第一位の疾患です。中には誤診が含まれており、別の疾患であるようなケースも多いのですが、ともかく毎年統合失調症の入院患者と新規患者増加阻止の対策にかけているコストは莫大なものになっています。本人の生活に原因があるとは限らないがんや心疾患よりも多いのですから、なおさら統合失調症は本人に原因がある疾患とは限らないと見るべきです。

誤診をとりあえず考慮に入れないで申し上げますと、統合失調症の生涯罹患率は 1%、つまり、100 人に一人は罹患することになるため、強度の共感覚を持つ方が 100 人に一人くらいだと無理矢理に仮定すると、世の中には強度の共感覚者と同じくらい統合失調症者がいらっしゃるわけです。

（入院中の統合失調症者が多くいる一方で、共感覚者はいわゆる一般社会で生活している人がほとんどですので、一般の人たちは、普段の生活では共感覚者に出会う機会のほうが圧倒的に多いと思います。）

そのような状況で、「共感覚と精神疾患・精神活動は無関係」と考えることは、全く論理的ではなく、あなたのおっしゃることはとても的確だと思います。

あなたのような場合、ご自身の症状が、共感覚から来るのか、統合失調症から来るのか、と考えるよりは、全部まとめてしまい、あまり分類せずに受け止めるのも、一つの方法かもしれないと思います。分類の必要があるのは、「学問する」時であって、「生きる」時ではありませんからね。

私の場合、ありとあらゆる精神疾患に共感覚を照らし合わせて探究してみています。
もう一度、結論を申し上げますね。「共感覚を精神疾患と一緒にしないでほしい」と主張している人の場合、その人の共感覚には精神疾患・精神活動・「心の痛みや感動」の領域と重複するものがないから、そういう主張になっているだけです。それは、「共感覚と精神との間に深い関係を見る」あなたのような優れた視点を侵犯してはならないと私は思いますし、侵犯できないものだと私は思います。

【ご質問（共感覚と心の問題に関するもの）】
共感覚は「感受性」や「心の悩み」と関係ありますか？
（私の共感覚は私の鬱々とした性格と関係があるという思いは誤っているでしょうか？）
（共感覚は本当に「感動」・「感情」といった心の動きと関係なくて、「知覚」・「認知」の分野なのでしょうか？
（共感覚者には、心が感じやすい人が多いですか？）
（私は自分を過剰に「傷つきやすい人間」と感じて悩んでいます。それは何か共感覚に関係していますか？）
（私はこの世を生きにくいと感じていますが、私の共感覚と関係がありますか？）

類似のご質問を数名の方から頂きました。うち、掲載許可を下さった一名様の例を挙げています。

岩崎純一様

わたしは、たぶん共感覚者と言えるのですが、岩崎様のサイトを訪れて、「心の悩み」についてのページがたくさんあったことに、安心感を覚えました。
それはわたしが、そういったことに興味があり、わたし自身が共感覚と性格（心の動きや悩み）が結びついた人だと思っているからです。
わたしは小さいころから、とても感受性が高く、自分で思っているというより、親や周りからそう言われてきたのですが、
文字や音に色が見える感じも、その感受性の中に入っていました。
それなのに、今いろいろな共感覚の研究やサイトを見て回っていると、心のこととは関係ない、いわゆる知覚の問題なので、
一緒くたにしたらいけないと書いてあります。
それを見ていたら、また気持ちが暗くなってしまいました。
岩崎様のご著書を拝読させていただき、最初のほうは正直、一般的な共感覚の本よりも共感覚の範囲が厳しいと思いましたが、

文化のお話や、発達障害の方々への思いなどが書かれていて、ああ、わたしの気持ちはこれだと思いました。
わたしにとっては、とても出しゃばりなことかもしれませんが、共感覚をそのまま褒められることは、
わたしの生き方や人格をそのままでいていいと言ってもらえているのと同じに感じます。
ですので、それだけにその反対に、感受性や共感覚や心の悩み全体のことについて何らかの非難を身に浴びてしまうと、
とても落ち込んでしまい、人間に苦手意識を持ってしまい、一日中寝ていたりします。
それは、わたしの人間関係や就職活動に影響しています。
わたしの共感覚は感受性と結びついているので、社会が苦しく感じます。
岩崎様は、共感覚は「感受性」や「心の悩み」と関係ありますか？
わたしはあると思うのですが、普通に誰かにしゃべっても理解される気がしません。
とてもつまらないご相談で申し訳ございませんが、何かアドバイスをいただけたらと思っています。
よろしくお願いいたします。

【私からの回答】

私の身勝手な発想から結論を申し上げますと、あなたは、非常に優しく、思いやりがある方ではないかと思います。あなたは「共感覚」の語を、その生理学的な定義とは関係なく、「感受性」の意味で（「感受性」の別称の一つとして）使って生きていってよい人だと、私は思います。
あなたのような感受性の持ち主には、特にわざわざ何かを説明するようなことはないと思っています。アドバイスするということは、アドバイスされる人の上に立つということでもあると思うからです。むしろ私に何かを学ばせて下さる方には、特にアドバイスすることはないと思います。でも、それでは無責任なので、少し書きます。
あなたがおっしゃっていることは、一つ上の「共感覚と精神疾患との関係」に関するご質問と回答にも関係すると思います。「精神疾患」の範疇に入る精神活動か、そうでないかだけの違いと言えると思います。
共感覚一つを取っても、解釈は本当に人それぞれです。私の共感覚観は、その中でも相当にこだわりがあるので、サイトご訪問者も極めて特徴的だと思います。
簡単に申し上げますと、私は「共感覚は、各個人の感受性・精神活動・心の動きや、各民族の文化・習俗・民族性と関係がある」ことをずっと主張してきました。（詳しくは、私のサイト全体をご覧下さい。）
それは、「文字や音に見える色彩は感動的である」・「風景や人間に見える色彩は私の美意識・美学に影響している」といった私自身の経験に基づいてもいますが、心因性精神疾患

の発症によって共感覚が再生した方々や、発達障害と共感覚とを併せ持った方々に出会ってきたことにも基づいています。学校や職場でのストレス、暴力被害などによって共感覚がよみがえった方々がいらっしゃる中で、どうして「共感覚は精神活動とは無関係」と言えるでしょうか。

私のサイトは、いわゆる共感覚者や共感覚研究者、つまり、（一つ上のご質問・回答における）「共感覚（知覚の問題）と精神活動・心の話（思惟の問題）を一緒にされると困る」という立場の方々よりも、あなた方のような人たちのご訪問が多いのです。

少なくとも、「私はあなたのお気持ちが分かる」ということだけは言えそうです。

でも、あなた方のような「共感覚を感受性の別称のようにとらえる」意見が同意されるか批判を受けるかは、時と場合と人によります。それは、私が特によく知っているかもしれません。

私も、あなたと同じような見解を著書や講演で示してきたので、随分と批判を浴びたことがあります。現在も、「共感覚は精神活動ではない（感受性・感性・喜怒哀楽とは関係ない）」、「共感覚と発達障害は全くの別物である」とする主張が、共感覚者の中でも圧倒的です。

以下は、共感覚を持つ発達障害児についての話題ですが、私から見れば、この子の母親や回答者よりも、この子を検査した医者のほうが正しい判断をしていると思えます。あなたのような共感覚者がこのような場でご質問なさると大勢の共感覚者からどういう回答が返ってくるかは、ここをご覧になるとよくお分かりだと思います。

もちろん、どなたも真摯にお答えになっているとは思いますが、「共感覚は発達障害とは全く別のものです」という断言などは、やはり人として、してはいけないことだと思います。自分の身内に共感覚と発達障害の両方を持つ人がいないなら、探せばよいのだと思います。いえ、世の中にそういう人がいるだろうという予想が、初めからついていてもよいくらいだと思います。

共感覚(色聴)をもつ子供

一つ例を挙げます。「目が見えることは感動や心の悩みと関係がありますか？」と問うた人がいたとして、この人に対して「目が見えることは、単なる知覚処理の問題で、大脳の前頭前野における思考・思惟の問題とは無関係だから、関係がない」と答えた人がいたとします。つまりは、あなたに対して「共感覚を感受性と一緒にしてくれるな」と答えた方と同じことです。

もうこの時点で、両者は全く言葉の使い方が異なっているのだと思います。「行間を読む」とか「人の気持ちを読み取る」とか「コミュニケーション」といったことが全く機能していないように思います。

私は、言語学をやっているからかもしれませんが、このような言葉の応酬が極めて滑稽

に思えます。問うた人にとっては、「目が見えること」の中に「今見ている星空の感動的な光景や昔目撃したつらい光景」がもう入ってしまっています。それに対して、答えた人の言葉は、「“目”や“視覚”を辞書や医学書で調べると、そんな定義は書いていない」ということしか意味していません。永遠にこのようなやり取りが続いて、疲労して終わるだけだと思います。

共感覚についても同じことを思います。「共感覚を感受性と一緒にしないでほしい」と主張している人の場合、その人の人生においては、「感受性・感情・感動・感銘・性格・心の悩み・郷愁・哀愁・うつ状態・精神疾患」などの精神活動の領域と重複する体験や思惟が共感覚に伴ったことがないから、そういう主張になっているだけなのだと思います。

「がん」という病について、「私はがんになったが痛くなかった」と言う人もいれば、「私のがんはかなり痛かった」と言う人もいますね。これらをまとめると、「がんは痛みと関係がある」ということになります。論理とはそういうものだと思います。共感覚を人の心の営み、感動や苦悩と結びつけて考えることの重要性がどういうものか、お分かりいただけると思います。

少し非難されただけで傷ついてしまい、人間に苦手意識を持ってしまうとのことですが、私も昔はそういうところがありましたね。今もそういうところがあるのかもしれません。それを乗り越えるための方法が、本を書いたり、サイトを運営したりして、同じ性質の人たちと知り合うことだと自分では考えています。

まとまりのないことを色々と書きましたが、結局、少なくともあなた方とは、言いたいことが同じだと思います。

拙著でも、共感覚と連想との違いについて、非常に厳しく書いているところがありますが、あれは、スピリチュアル業界に対する私の対策として書きました。ただ、かなり厳格に書きすぎたきらいがあると思います。こんな小細工を考える私のような人は「共感覚と精神活動に深い関係を見る」ところまでは進むけれども、自分自身が「精神疾患」だとまでは言えない、といったところでしょうね。

あなたのような人たちが不当に批判されないように、「共感覚者としての認定」を受けられる間口を必要以上に厳格に狭くしない限り、今の日本の新宗教・スピリチュアルブームの現状からしてまずいことになると思ったために、あのように書いたのですが、実際には、「共感覚が豊かな人は、普段の連想力・想像力・傷つきやすさにも長けている」というのが、私の最も言いたいことです。

ところが、後者だけを突然本に書いて世に出すと、まずいことになる可能性は、残念ながら日本の風潮としてあると思っています。

少し横道にそれますが、いわゆる大乗仏教という仏教の大宗派がありますね。この中で、私は中観や唯識という思想が特に好きで、よく自分の共感覚と結びつけて考えるのです。一言で言いますと、「知覚は思惟である」ないし「知覚は心である」。これが、この二つの思想を共感覚に引き寄せた際の私の語り方です。

簡単に言いますと、「感覚・知覚・認知・認識・思考」などと低次から高次に至る外界把握のプロセスを無理矢理に分類するから、おかしいことになるのだ、という考え方です。余談でしたが、ご興味があれば、以下もお読み下さい。

自閉症・現代物理学・仏教哲学・日本の心についての一考
（その一）　（その二）　（その三）

さて、最後になりますが、他人からの非難に過敏に反応してしまうタイプだと、日常生活で色々と苦労されると思いますが、少なくとも私のサイトなどを色々とご覧になって安心していただけるところがあるとよいなと思います。

上の精神疾患についての回答と同じような結論になりますが、もう一度書いておきます。

共感覚によって感動・苦悩・喜び・悲しみを体験したことがない共感覚者は、「共感覚は精神活動とは関係がない」と言うに決まっています。共感覚によって感動・苦悩・喜び・悲しみを体験したことがあるという共感覚者は、「共感覚は精神活動と関係がある」と言うに決まっています。そして、両者の間にはすでに、「共感覚」の語の用い方の差異があります。

【ご質問（共感覚・共感覚者を非難するもの）】
岩崎さんの共感覚は、危険ドラッグとか覚せい剤とか、何かヘンな薬物をやっているか、文字に適当に色を塗って妄想世界を創り上げているか、どちらかなのでは？

類似のご質問を数名の方から頂きました。うち、掲載許可を下さった一名様の例を挙げています。

岩崎さんの共感覚の例（画像など）を見ていると、失礼ながら、危険ドラッグとか覚せい剤とか、何かヘンな薬物をやっているか、文字に適当に色を塗って妄想世界を創り上げているか、どちらかなのでは？と思ってしまいます。本当のところはどうなのでしょうか？

【私からの回答】

本当のところは、違法薬物も使用しておらず、文字に適当に色を塗って妄想世界を創り上げてもおらず、生身の自分の知覚世界を忠実に再現したものが、私の共感覚の例になります。

このような知覚世界を公表しておりますと、嬉しいことに、哲学や文学や芸術、神経科学や生物学や医学など、様々な学術分野の方々から研究上のお問い合わせを頂くことも多

いですが、一方で、違法薬物の使用者からの不審な問い合わせが送られてくることも確かです。

特に欧米の共感覚研究では、共感覚者の知覚世界が一部の違法薬物によっても人工的に体験されるという科学的知見が多く示されていることは確かです。この知見の差は、日本と欧米諸国とで薬物の分類法や法律上の扱いが異なること（欧米諸国では多くの合法的な薬物共感覚実験が可能であること）に、主に起因しています。

これについては、私個人が立ち上げた日本共感覚研究会の活動の一環として、違法薬物による共感覚体験に関する調査報告書を作成しておりますので、下記のサイトの調査報告書のページからご覧下さい。この研究会は、日本の共感覚研究や共感覚に関連ある学術研究及び社会的諸問題の動向・実態の調査・追跡を行っております。

私のもとには、とりわけ「岩崎さんの画像 A のような色彩感覚を得るには、どの危険ドラッグがよいですか？」、「今度どこそこで薬物 B のパーティーをやるので、参加しませんか？」といった、私の違法薬物使用を前提とした問い合わせが送られてきます。この通りの日本語文ではなく、隠語・暗号を用いた独特の言い回しが使われており、そもそも違法薬物の使用中や使用直後と疑われるような不審な様子のもとに送られてきます。

このような問い合わせについては、無視することも多いですが、ある程度の発信者情報が分かる場合には、公安当局・警察に通報し、情報を提供しております。

日本共感覚研究会

日本共感覚研究会（旧　日本共感覚関連動向調査会）

【ご質問（共感覚・共感覚者を非難するもの）】
共感覚は本当に実在するのですか？
（共感覚者を自称する職場の同僚を信用してもよろしいでしょうか？）
（共感覚は、「人に話を聞いてもらいたい」というわがままによる虚言ではないでしょうか？）

類似のご質問を数名の方から頂きました。うち、掲載許可を下さった一名様の例を挙げています。

岩崎様、共感覚は本当に実在するのですか？
正直、どうも疑わしいです。
「文字に色が見える」とか「音階に色が見える」と言ったところで、学歴や仕事の業績、英語の能力のように数値化されず、いくらでも嘘がつけますし、なんとなく神秘的な人間

に見せることができるため、便利です。
　それに、共感覚者には障害者的な人、自分に自信が持てていない人も多いようですし。
　傲慢な言い方になりますが、共感覚は、ただの目立ちたがり屋というか、アダルトチルドレン的な人、子どもっぽい成人が思いついた絵空事ではないでしょうか？

【私からの回答】

　今でも共感覚の存在を疑っている方がいらっしゃることは、私も存じ上げていますし、かなり関心を持っています。
　私も「共感覚」と「発達障害などの各種の障害」とを結び付けて探究しておりますが、その結び付け方のニュアンスがあなたとは全く異なる気がします。先に挙げた方々のご質問における「共感覚」と「精神疾患・精神活動・感受性など」との結び付け方と私の結び付け方とが似ていて、これらとあなたの結び付け方とがかなり異なっている気がします。
　それにしても、これだけ「私には共感覚がある」と言って回っている私が唐突にこんなことを書くと、驚かれるかもしれませんが、あえて書いてみますと、共感覚に限らず、万物は幻想であるかもしれないし、かつ万物は実在であるかもしれない、というのが、私の考えです。
　ある物事・現象・概念が「ある（ない）」とはどういうことなのか、あるいは「ある（ない）と信ずる」とはどういうことなのか、それはヘーゲル、フッサール、ハイデガー、メルロ＝ポンティなどをお読みになって、存在論（オントロジー）を勉強していただくと面白いと思います。私は、これらの哲学が大好きで、共感覚との関連でも追って勉強しています。他にも、私は仏教哲学が好きで、中観・唯識・禅などの分野や、仏陀や竜樹といった過去の仏教者たちの考え方も見ています。もっとも、今は特定の宗教・宗派など関係ありませんが。
　ともかく、哲学書でも、論理学書でも、仏教書でも、聖書でも、クルアーンでも、何でもよいので触れてみた上で、「存在の有無」とはいかなることかについて、ご自身なりのお答えをお持ちになることをお勧めいたします。
　ちなみに、よくあるような「かつては共感覚者は差別されていたが、次第に共感覚者の存在が認められるようになってよかった」という説も、私は採りません。事物・事象の有無を実体論一辺倒でとらえる議論そのものに興味がないためです。
「ある（ない）」・「ある（ない）と信ずる」とはいかなることかを考え込んだことがなければ、共感覚の存在を信ずるにしても、信じないにしても、あるいは共感覚者当人であっても、特に違いはないというのが、私の意見です。

【ご質問（共感覚・共感覚者を非難するもの）】

部下の共感覚者が鬱陶しいです。指導するにあたり、アドバイスをいただけますか？
（共感覚や学習障害を社会に持ち込む人をどうにかしてほしいです。）
（世の中はなぜ共感覚ごときで個性だ個性だと騒ぐのですか？）
（ほとんどの共感覚者は、実際は大したことのない感覚しか持っていないのでは？）

類似のご質問を数名の方から頂きました。うち、掲載許可を下さった一名様の例を挙げています。

岩崎純一様

私は女性ですが、最近共感覚や感受性といった奇妙なものをテーマに持ち出してくる部下の若い女性たちを見るとイライラします。事務作業を頭で色分けしているなんて、気持ち悪いです。仕事にそんなものを持ち込むなという感じです。指導するにあたり、アドバイスはございますか？

申し訳ありませんが、私はなぜか、女性がよくやるようなペンの色分けや、ノートがカラフルに小奇麗に書かれているのを見ると、イライラします。乱暴かもしれませんが、そんなものはさっさと次の仕事の集中力やチームとしての動きに回せ、と思います。

共感覚はそんなに暇がある人にしか身に付かない感覚なのかとさえ疑います。

ある文字が赤い色の味で別の文字が青い色の味という感覚など、私などには意味が分かりません。そんなことを感じたことも思ったこともないのです。幸いなことに、私はそれなりに社会的地位があるので、女性的である暇などなく、忙しい毎日を送っております。

女性の個性・感性云々を言っている暇があったら、女性の精神的・経済的自立を目指さないと、子育てもできないと思っております。別にあえて個性・感性を言わなくとも、また、片親・シングルマザーであっても、今は子供は育ちますし、そんなことが子供の心や道徳に影響を与えるということを、私は信じておりません。

女性の共感覚や女性らしい目線のデザインなど、発想が稚拙で鬱陶しくて仕方がありません。共感覚の男性やアスペルガー・発達障害の男性も、社会向きでないため、仕事の仕方などを見ていてイライラします。

感性といったことを職場の空気に持ち込むことから卒業し、世の女性・母親がまず強くないといけません。

機転と申しますか、自分を抑える時は抑え、スムーズにサッと気配りができる人間になるということを、部下の女性に指導することに四苦八苦しております。

【私からの回答】

なぜあなたがイライラなさるのか、その答えはご自身で探求されるしかない気がします。

あなたが告白して下さった本心は、社会的地位のある女性がしばしば持っている人間観・価値観であるというのは、ひしひしと感じます。ある意味、典型的な例を示して下さいましたので、勉強になります。最近は、女性企業家・経営者、一部のフェミニスト・人権団体・NPO、女性官僚、教育ママの方々などの間でも、このような考え方の女性が増えているというのは感じています。

むしろ、あなたのご意見は、昨今の労働環境問題、パワーハラスメント問題、少子高齢・晩婚化社会への私の関心を過剰に呼び起こします。

あなたのおっしゃっていることは、共感覚というテーマとはもはや別物であるようにも思います。私がそこかしこで「女性疎外」と呼んでいるものに思えます。女性を傷つけるのは男性ばかりではないということが、私に分かるばかりだと感じます。

ちなみに、私は個人的には、イライラしている時間のある女性より、文字を色々な色に塗り分けざるを得ない感受性に毎日忙しい女性のほうに関心があります。そして、後者のような感受性豊かな女性の存在が子供や周囲の人間や国におのずから良い影響を与えるということを信じます。ただしそれは、「母子家庭で育った子は感受性に乏しい」ということを全く意味しません。しかし、これをどう解釈するかは人それぞれなのだと思います。

人間にはそれぞれの専門分野や得意分野というものがあるかと思います。画家は絵画が専門であり、物理学者は物理学が専門であるように、私は現代の日本社会に生きにくさを感じておられる方々の心や知覚のあり方を観察することが、専門というよりは、得意です。あなたのようなイライラは、申し訳ございませんが、得意分野ではないと言えます。

もし一点だけあなたに共感できるとしたら、あなたのおっしゃる部下が、「私は人と違って共感覚で苦労して生きてきたのに、上司が私に振り向いてくれない」と一方的に嘆いているような場合です。確かに、このような人は増えてきている気がします。若者だけでなく、高齢者にも多いと感じます。もしあなたがおっしゃっていることがこれであるならば、併記させていただいた「世の中はなぜ共感覚ごときで個性だ個性だと騒ぐのですか？」という別の方のご質問についても、同じ回答をしたく思います。

この点だけは、あなたに同感できる部分があります。例えば、テレビの長時間番組などで、障害者のスポーツや生活をカメラで追いかけ、それを絶賛するような障害者特集がよくありますが、こういったことに対して私は違和感を覚えます。マスコミ側と障害者の家族の双方に責任がある、そして時に障害者当人にも責任がある、というのが私の考えです。

あなたの主張がこれと同様のものであるならば、その点にだけは共感します。

ちなみに、あなたが拙著や私のサイトをどのくらいお読みになっているかは存じ上げませんが、そもそも「共感覚の発生機序自体は個性ではない」というのが私の立場です。自分に血液が流れていることや自分が呼吸していることを「個性」だと言う人はいませんね。それと同じことだというのが、私の立場です。

むしろ、共感覚の発生機序は、近代的個性がもし削ぎ落とされても人間の原初的・普遍的な知覚の機序として残存する可能性があるものである、というのが私の考えです。

【ご質問（共感覚ビジネスに関するもの）】
岩崎さまも私の共感覚セラピーに参加して、人生のレベルアップをしませんか？
（岩崎様も、共感覚や「気」を操ることのできる選ばれし人間として、世のため人のために働き、多くの人々を救済しませんか？）

類似の勧誘が数名から来ました。うち、掲載許可が得られた方々の例を挙げています。

岩崎純一さま

私は共感覚セラピストの女性です。岩崎さまも共感覚をお持ちのようですが、私からすると、まだまだあなたの共感覚オーラ、共感覚霊力は低次元にあるようです。ただ、私にはすでに見えている高次元の霊界に至る能力は、あなたもお持ちだとお見受けしますので、私の共感覚セラピーに参加して、人生のレベルアップをしませんか？

岩崎純一様

私は●●県●●市で気功師をしている者です。岩崎様のご著書を読み、この人とならご一緒に人生をかけた仕事ができると思いました。私と共に、共感覚や「気」を操ることのできる選ばれし人間として、世のため人のために働き、多くの人々を救済しませんか？

【私からの回答】

お断り申し上げます。

第三編　三十歳～三十九歳

第一部　ご質問・ご相談や通報の例

2013 年 2 月 5 日　起筆
2015 年 7 月 16 日　公開
2017 年 3 月 13 日　最終更新

共感覚研究者を名乗る事業者による悪徳商法の事例
共感覚セラピストを名乗る事業者による悪徳商法の事例
麻薬・危険ドラッグの使用による共感覚体験に関する質問とレイブパーティーへの誘いの事例

共感覚研究者を名乗る事業者による悪徳商法の事例

【ご相談内容】

わたしは、「ドレミのドが青」や「ひらがなの“あ”が赤」のような感覚を持っていますが、ネットでそれが「共感覚」というものかもしれないと知り、共感覚カラーセラピーに参加し始めました。

あるとき、ある女性から「共感覚を研究している研究者です。自分の感覚を知りたい人は調べてあげます」と言われたので、自分の感覚がウソでないことが認められると思ってうれしくなり、やりとりをしてその場（わたしが大学の共感覚の先生の研究室か何かと思っていた教室）に参加し、代表の女性が一人と、わたし以外の参加女性が数名いましたが、少し検査料を支払ったところ、「この文字や音が何色に見えますか？」などの共感覚研究らしいものはほとんどありませんでした。

時々そのような質問にまじめに「青色」と答えても、そのリーダー的な立場の女性に「まだまだ答えが表面的すぎる」と怒られてしまい、「もっと高度な共感覚セラピーを受けたほうがいい」と言われ、感覚の磨き方や生き方全体の講義を聞かされてしまい、そこまではお金を出してしまいました。

頭が染まるというか、おかしくなる前に逃げることができましたが、それ以来、ネットの共感覚情報が信用できなくなりました。

【本会からの回答】

あなたが「受講」したセラピーは、典型的な悪徳商法であると思われます。そもそも現在のところ、共感覚者に対する研究調査は、共感覚者側が「被験者として検証や聞き取り調査を受けた上で、謝礼をもらうもの」であって、「お金を出せば調べてもらえるようなものや身につくもの」ではありませんので、ご注意下さい。

ただし、あなたの感覚そのものは本当に共感覚である可能性が高いです。

判断が非常に難しいかと思いますが、「ネットで得た情報であるかどうか」という視点ではなく、「その情報が正しい（合法の・誠実な）ものであるかどうか」という視点のほうが、自分の身を守ることにつながるかと思います。

事実、正式な研究者や大学院生による共感覚調査への参加者の募集が mixi などの SNS

サイトで行われることもありますし、逆に、「共感覚」の語を全くサイトに明記していないセラピストの講座を受講したときに、突然「あなたには共感覚が足りない」などとして突然「共感覚セラピー」が始まるようなケースもあります。
共感覚セラピストを名乗る事業者による悪徳商法の事例

【ご相談内容】

わたしは、うっすらとした共感覚はあると思いますが、よりきらびやかな共感覚を持つ人に憧れてしまい、ある日、ネットで見つけた共感覚者の女性と知り合いになりました。（初めての「共感覚友だち」・・・のはずでした。）
彼女は、世の中の役に立つため、共感覚を使ったカラーセラピーもやっているとのことで、彼女のセラピー室にどのような場所か興味本位で入ってしまったところ、彼女（自称「前世のステージが一段高い共感覚セラピスト」の女性）が男性と一緒に、参加女性たちに順番にセラピーをする部屋でした。
「あなたは共感覚の修行が足りない、感性の光？？を浴びないと人生が不幸になる」と言われ、あまりに突然のことで、パニックになっているところ、「ほら、やっぱり不幸みたい。もっと幸せにしてあげる」というようなことを言われ、別の部屋でのその男性との共感覚セッションや共感覚ワークをすすめられました。（女性としての「共感、シンクロニシティ、エンパシーの練習」というようなものだったと思います。）
そこで、別の部屋に移動する前になんとか目が覚めることができました。ただ、別の部屋に移動した参加女性は、平気な顔で戻ってきましたので、今思えば、わたしを移動させるためのセラピストメンバーだったのだと思います。

【本会からの回答】

あなたが「受講」したカラーセラピーも、本来の共感覚とは何の関係もないもので、犯罪に当たるものである可能性もあります。そのようなセラピーの経験・未経験によって人生の幸・不幸が決定するようなことは一切ありません。
それに、「共感覚」は「共感、シンクロニシティ、エンパシー」のことではありません。関連があるとしても、「共感覚者」どうしの「共感」というものがあるだけです。言葉の問題の解決だけでこのような問題が解決するわけではありませんが、今後十分にご注意いただければと思います。
このような悪徳商法を行う個人や団体の存在は、日本の共感覚研究の未来にとって大きな弊害となりますし、残念ながらこういったセラピーに引っかかってしまう人がいることでその市場が拡大してしまう現実がありますので、ぜひご注意いただければと思います。
「共感覚」や「共感覚者」の定義については、本会もなるべく厳格なものを提言し、学術

的な意味に引き戻す努力をしていく所存です。
麻薬・危険ドラッグの使用による共感覚体験に関する質問とレイブパーティーへの誘いの事例

【勧誘内容】

（隠語が多用されており、一般的には判読不能の日本語であるため、本会にて文面を大幅に変更し、一部のみを掲載したが、内容に変更はない。）
（この勧誘は、岩崎会長の個人サイト「岩崎純一のウェブサイト」宛に送られてきたものだが、このサイトを熟読せず、このサイトで扱う共感覚が極めて学術的なものであることに全く気づかずに、極めて軽率な意識または朦朧とした意識で勧誘をおこなったものと考えられる。）

あなたら（岩崎会長ら）も共感覚を体験しちゃったみたいですが（「麻薬や危険ドラッグによって」と言いたいと思われる）、何ヤってますか？　●●●（危険ドラッグの商品名）以外で教えて下さい。（「すでに自分たちが使用している●●●以外に何の麻薬や危険ドラッグを使用すれば共感覚を体験できますか？」と言いたいと思われる。）
よければ今度。

【本会の対応】

質問については無視し、回答せず。
ただし、隠語を解読し、送信元データの解析をおこない、判明した情報については、質問の事実と共に厚労省・東京都・保健所・警察などに提供した。また、共感覚についての学術上の簡単な解説も提供した。
このように共感覚と麻薬・危険ドラッグを結びつける者がいる理由の一つと考えられるものについて、以下の各ページに記載してあるので、参照されたい。

◆日本の共感覚史と会の沿革
◆研究動向・社会問題の調査

日本共感覚研究会

優良な共感覚研究を実施していると認められる

日本国内の研究機関・研究者等に関する最新報告書

2013 年 2 月 10 日　起筆、作成及び改訂継続の総会承認　2015 年 7 月 16 日　公開
2015 年 8 月 2 日　更新　2016 年 9 月 12 日　最終更新

総責任者　　日本共感覚研究会　会長　　岩崎　純一
掲載サイト　http://iwasakijunichi.net/
特設サイト「日本共感覚研究会」
厚生労働省、消費者庁、公正取引委員会、東京都に提供
全ての著作者の著作者人格権を侵害しない限り、CC BY-NC-ND 4.0

本表は、本会の役員が被験者や聴講者等として実際に共感覚に関する検証実験、聞き取り調査、講座等に参加した結果、優良な研究を実施しており、他の会員または一般の共感覚者等に対しても参加協力を推奨するに足る安全かつ健全な研究機関・研究者であると認められる研究機関・研究者を掲載するものである。

掲載基準は以下の通りである。

●研究室を主宰する常勤研究者や民間企業の常勤研究員による研究のみならず、博士研究員（ポスドク）以上の研究である限り、研究者の被雇用形態を問わず掲載する。

●修士課程または博士課程における研究（修士論文または博士論文のための研究）については、紀要やウェブサイト等に研究内容や論文本体が掲載されたものを中心として、掲載する。

●学部学生の卒業研究（卒業論文のための研究）については、当該学生を監督する教員・研究者または当該大学・学部・学科・研究室から本会または会長個人に対し、学部学生による卒業論文自体が修士論文または博士論文に比して社会的に有しうる学問的価値の低さを懸念する等の理由により、本サイトに掲載しないよう要望があった場合、掲載しない。

なお、研究者およびその執筆論文等の詳しい情報については、以下のウェブサイト等にて検索されたい。

※　researchmap（国立研究開発法人科学技術振興機構知識基盤情報部、国立情報学研究所 社会共有知研究センター）

http://researchmap.jp/

※　KAKEN - 科学研究費助成事業データベース（国立情報学研究所、文部科学省、日本学術振興会）　https://kaken.nii.ac.jp/

※　日本の研究.com（株式会社バイオインパクト）　https://research-er.jp/

※　CiNii Articles 日本の論文をさがす（国立情報学研究所）　http://ci.nii.ac.jp/

※　Google Scholar（Google）　https://scholar.google.co.jp/

●人文・社会学系　●自然科学系　●リベラル・アーツ系、その他

研究機関名	研究者氏名	研究室・学会のウェブサイト	備考
関西学院大学 理工学部情報科学科 長田典子研究室	長田 典子	http://ist.ksc.kwansei.ac.jp/~nagata/	主に「色聴」を研究しており、特設ページ「色聴は共感覚」にて協力者を募集。
東京大学大学院 人文社会系研究科（文学部） 心理学研究室（統合的認知研究グループ）	横澤 一彦	http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~yokosawa/lab/index-j.html	主に「色字」や「感覚融合認知」を研究。特設ページにて協力者を募集。
立教大学 現代心理学部 心理学科	浅野 倫子	http://www2.rikkyo.ac.jp/web/michiko_asano/	
中央大学 理工学部 人間総合理工学科 応用認知脳科学研究室	檀 一平太	http://brain-lab.jp/wp/	
電気通信大学 電気通信学部 人間コミュニケーション学科・専攻 坂本真樹研究室	坂本 真樹	http://www.sakamoto-lab.hc.uec.ac.jp/	
表象文化論学会		http://www.repre.org/index.php	第 4 回大会において「研究発表４：共感覚の地平――共感覚は「共有」できるか？」の研究発表が行われた。 【コメンテイター】折田明子（中央大学） 【司会】門林岳史（関西大学）

			感覚のマイノリティ——共感覚と共感覚者をめぐるフィクション 　北村紗衣（東京大学） 日本人共感覚者（海外在住経験者）の文字認知 　湯澤優美（トランスコスモス） 共感覚の情報処理 　斉藤賢爾（慶應義塾大学）
日本共感覚協会	松田　英子	http://synn-japan.candypop.jp/	米国共感覚協会や英国共感覚協会にならい、日本の共感覚者のコミュニティとして機能することが期待されるが、事実上、遺伝子研究を目的として日本学術振興会の特別研究員個人が主催する団体である。
椙山女学園大学　生活科学部生活環境デザイン学科	橋本　令子		
琉球大学　留学生センター	武藤　彩加		
徳島大学大学院　ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部	山田　仁子		
日本感覚統合学会		http://www.si-japan.net/	共感覚をも扱っているが、ただし「感覚統合」とは「感覚統合療法」のそれであって、いわゆる「共感覚」とは限らないことに注意。

文京学院大学総合研究所	岡本 恵美子		
東京都立大学 大学院人文科学研究科	井原 晴佳		
慶應義塾大学 心理学教室	増田 直衛		
大阪府立大学 現代システム科学域 環境システム学類 人間環境科学課程	牧岡 省吾	http://www.hs.osakafu-u.ac.jp/~makioka/Makioka_Shogos_Home_Page/Home.html	言語獲得、視覚的単語認知過程の観点からも共感覚にアプローチしている。
大阪市立大学大学院 生活科学研究科	酒井 英樹	http://colorscience.sakura.ne.jp/	
久留米大学 比較文化研究所	今村 義臣		
久留米大学 文学部心理学科	木藤 恒夫		
専修大学 人間科学部 心理学科・大学院心理学専攻	山上 精次	http://www.psy.senshu-u.ac.jp/	学科および山上精次教授が共感覚を積極的に取り上げているとは言えないが、多くの門下生が共感覚研究をおこなっており、その研究・実験方法は健全である。
多感覚研究会		https://sites.google.com/site/multisensejapan/ http://www.brl.ntt.co.jp/people/kitagawa/multisense/	
金沢工業大学 情報フロンテ		http://h-jingu.kit.labos.ac/ja	

ィア学部 心理情報学科 神宮英夫研究室			
東京大学大学院 総合文化研究科 超域文化科学専攻			国際シンポジウム「バルト・共感覚の地平」を主催。
UTCP（21 世紀 COE「共生のための国際哲学交流センター」			同上
埼玉医科大学における共感覚者による研究会			共感覚当事者が複数人登壇した。（2013 年）
九州大学大学院 人間環境学府	西 由紀子		
国立研究開発法人放射線医学総合研究所	山田 真希子		
共感覚判定テスト（筑波大学、会津大学筑波大学 CAVE Lab.（ビジュアルサイエンス研究室）、会津大学コンピュータ理工学部数理情報科学講座）		http://www.cavelab.cs.tsukuba.ac.jp/~gotoh/syneth/	研究内容は健全であるが、ウェブサイト上でのアンケートのみであり、回答に当たっての規約や被験者が回答したデータの管理方法についての説明、実験主宰者と被験者との間に交わされる契約書面が一切なく、早急に是正すべき点が放置されている。ウェブサイトを作成した学生への指導も徹底すべきである。
色字者判定テスト（筑波大学、会津大学筑波大学 CAVE Lab.（ビジュアルサイエンス研究室）、会津大学コンピュータ理工学部数理情		http://www.cavelab.cs.tsukuba.ac.jp/~gotoh/grapheme/	同上

報科学講座）			
色聴者判定テスト（筑波大学、会津大学）	篠原 照樹	http://www.synaesthesia.jp/	同上
東京女子大学 現代教養学部 人間科学科心理学専攻	田中 章浩	http://akihirotanaka.web.fc2.com/	
大谷大学 文学部 人文情報学科 比較認知科学	髙橋 真		
広島文化女子短期大学 幼児教育学科	古矢 千雪		
公益財団法人脳血管研究所	杉下 守弘	http://mihara-ibbv.jp/	音楽家坂本龍一などの共感覚を検証。

日本共感覚研究会

共感覚の学術的定義を逸脱または拡大解釈した事業を展開する日本国内の団体・個人事業主等に関する最新報告書

2013 年 2 月 10 日　起筆、作成及び改訂継続の総会承認　2015 年 7 月 16 日　公開
2015 年 8 月 16 日　更新　2016 年 9 月 12 日　最終更新
総責任者　　日本共感覚研究会　会長　　岩崎　純一
掲載サイト　http://iwasakijunichi.net/
特設サイト「日本共感覚研究会」
厚生労働省、消費者庁、公正取引委員会、東京都に提供
全ての著作者の著作者人格権を侵害しない限り、CC BY-NC-ND 4.0

本表は、本会の役員が観覧者や聴講者等として実際に共感覚に関する展覧会、聞き取り調査、講座等に参加した結果、共感覚の学術的定義を逸脱または拡大解釈した共感覚を標榜した事業活動を展開しており、他の会員または一般の共感覚者等に対して参加協力を積極的に推奨することが躊躇される研究機関・研究者であると判断される研究機関・研究者を掲載するものである。

このような団体の多くは、グローバル・ビジネス事業、広告事業による利益増進を狙う政府機関や企業、およびそれらの方針に賛同する（法人としての）大学や著名人・文化人などで占められており、そこで展開されている共感覚関連事業の実態は、（研究室・学者レベルとしての）

大学などにおける学術的な共感覚の研究とは何ら関係のないものがほとんどである。

事業名	事業者名	ウェブサイト	備考
こころの時間学　-現在・過去・未来の起源を求めて-	文部科学省	http://mental_time.umin.jp/	文部科学省担当者・総括班の共感覚への理解が「グローバルな人材となるための能力」という本来的定義を大きく逸脱したものであったが、「こころの時間学 —現在・過去・未来の起源を求めて—」（山田 真希子）の研究以降、健全化されている。
東京藝術大学 COI-T 拠点 「感動」を創造する芸術と科学技術による共感覚イノベーション 「革新的イノベーション創出プログラム（COI STREAM）」 ●この事業については、以下に詳細を別掲した。 産学官民による「共感覚・知覚・感性」関連事業の 2020 年東京オリンピック・パラリンピック利権化に対する注視 http://iwasakijunichi.net/jssg/hokokusho/hokokusho6.pdf	【事業主体】 文部科学省 国立研究開発法人　科学技術振興機構 【主要拠点】 東京藝術大学　共感覚イノベーションセンター 東京藝術大学　産学官連携棟 Arts & Science LAB. 【中核機関】 東京藝術大学 株式会社 JVC ケンウッド 【参画機関】 大阪大学	http://innovation.geidai.ac.jp/ （東京藝術大学サイト内公式ページ） http://www.jst.go.jp/coi/site/site.html （科学技術振興機構サイト内）	「共感覚イノベーション」がどのような技術革新を指すか問い合わせたところ、「世界文化遺産をテーマとする共感覚コンテンツの開発と、教育やビジネスへの活用」を指すとの回答があった。 実際はグローバルなロビー活動・ビジネス活動の一環であり、特に企業関係者を中心に、「共感的に感動できる技術革新」といった意味に介しているケースが見られた。 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて産学官民の連携や障害者支援を謳い、共感覚コンテンツを創造するなどとしており、いくつかの展覧会は成果を挙げてはいるが、国内の共感覚者や障害者が何らかの直接的な恩恵を受けることは考えがたい。 根本的に、多くの関係機関に学術用語（テクニカルターム）としての「共感覚」への理解の前提が欠落している。 「人々の感動・感性の発露による文化遺産関

	名古屋大学 京都大学 情報通信研究機構 ソフトバンクロボティクス Makers' Base NHK エンジニアリングシステム NHK エンタープライズ NHK プロモーション		連事業の活性化」を謳うなら、「共感覚」の語を用いる必要がなく、用いないとなると、文科省と科学技術振興機構が同じく 2020 年に向けて推進している「精神的価値が成長する感性イノベーション」などの他のプログラムと区別がつかず、「共感覚イノベーション」そのものを単独で実施する必要がない。
東京アートミーティング[第 3 回] アートと音楽 ―新たな共感覚をもとめて 共感覚実験劇場 ●この事業については、以下においても言及した。 産学官民による「共感覚・知覚・感性」関連事業の 2020 年東京オリンピック・パラリンピック利権化に対する注視 http://iwasakijunichi.net/jssg/hokokusho/hokokusho6.pdf	【総合アドバイザー】 坂本龍一（音楽家） 【主催】 東京都、東京都現代美術館・東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）、東京新聞、東京藝術大学 【助成】 芸術文化振興基金 【会場】 東京都現代美術館　企画展示室 同時開催イベント多数（東京藝術大学など） ↓イベント例 ◎共感覚実験劇場 【主催】	http://www.mot-art-museum.jp/music/ （東京都現代美術館サイト内公式ページ） http://www.rekibun.or.jp/ （公益財団法人東京都歴史文化財団） https://www.artscouncil-tokyo.jp/ja/ （アーツカウンシル東京） http://geidai-oil.com/tsaw/ （共感覚実験劇場）	事業としては一定の成功を収めているが、「共感覚」の語の使用の必然性は全く観察されず、その使用の仕方は極めて不適切である。 同様の批判が多くの共感覚者から出ており（以下に一例を挙げる）、「新たな共感覚」なるものが何を指しているかも不明であり、展覧会の内容自体もどの点が目新しい点なのかが不明瞭である。 http://togetter.com/li/438254 （批判の一例）

	同上 【協力】 フィンランド GENELEC 社、M-AQUA 【企画】 東京藝術大学美術学部絵画科油画　坂口寛敏、小山穂太郎 音楽学部音楽環境創造科音楽音響創造　西岡龍彦 【会場・日時】 東京藝術大学大学美術館 平成 25 年 1 月 7 日-1 月 17 日 東京藝術大学千住校地 平成 25 年 1 月 13 日・14 日		
人工共感覚生成と右脳ウェルニッケ超覚醒特別セッション など	苫米地 英人	http://www.hidetotomabechi.com/	人工共感覚の特訓による特殊能力の開花を標榜して、様々な共感覚特訓のための講座を開催しているが、いずれも大学等の共感覚研究機関において取り上げる意義があるとは考えられない。 ただし、昨今スピリチュアリズムが流行し、共感覚の用語や概念もスピリチュアリズムに簡単に取り込まれていく中、左記セッションの主宰苫米地英人は、著書『スピリチュアリズム』（にんげん出版、2007）の中で、「昨今のスピリチュアリズムは、仏陀の教えや大乗仏教の根本的な曲解である」との観点から、的確なスピリチュアリズム批判を展開している。 共感覚関連セッション等は、あくまでも一つのエンターテインメントとして実施してい

			ると考えられる。

日本共感覚研究会

共感覚の学術的定義を著しく逸脱した事業を展開する日本国内の団体・個人事業主等に関する最新報告書

2013 年 2 月 10 日　起筆、作成及び改訂継続の総会承認　2015 年 7 月 16 日　公開
2015 年 8 月 2 日　更新　2016 年 9 月 12 日　最終更新
総責任者　　日本共感覚研究会　会長　　岩崎　純一
掲載サイト　http://iwasakijunichi.net/
特設サイト「日本共感覚研究会」
厚生労働省、消費者庁、公正取引委員会、東京都に提供
全ての著作者の著作者人格権を侵害しない限り、CC BY-NC-ND 4.0

本表は、本会の会員または一般の共感覚者・被害者等から寄せられた情報をもとに、役員が聴講者・調査員等として実際に共感覚に関する検証実験、聞き取り調査、講座等に参加した結果、法令・条例・社会規範・良識等に照らして懸念されるべき事業活動をおこなっており、他の会員や一般の共感覚者等に対してその旨を公表し注意勧告すべき団体・個人事業主であると認められる団体・個人事業主を掲載するものである。

『岩崎純一全集』第六十九巻「科学技術、産業（二の九）」

この調査活動は、別に掲げた「囮（おとり）調査及び不慮の事態に関する規程」に基づき行われたものである。

また、本会は次の(A)の事項を主に調査・回答しており、(B)の事項については調査・回答などを行うとは限らない。

(A) 調査・回答などを行う内容

「共感覚と呼称すべきでない超能力・透視能力・セラピー能力・詐欺のノウハウ・自己啓発セミナー開催能力などを共感覚と呼称していないかどうか」

「当該人物が共感覚だと自称するその超能力とそれによる活動などが学術界において取り上げるに足る知覚様態や活動であるかどうか」

「当該人物が共感覚だと自称するその超能力などの教育・伝授のために受講者などに金銭を要求していないかどうか」

「当該人物が共感覚だと自称するその超能力などによって対価を得るそのような行為が違法行為や条例違反になっていないかどうか」

(B) 調査・回答などを行うとは限らない内容

「当該人物が共感覚だと自称するその超能力などが本物であるかどうか」

「当該人物が共感覚だと自称するその超能力などを信用してよいかどうか」

団体名・活動名	代表者氏名	ウェブサイト	備考
株式会社トゥルーカラーズ ほか「TC カラーセラピー」を標榜	中田 哉子	https://www.tccolors.com/	現在のところ、およそ 70 の団体の存在を確認しており、その 8 割以上が女性による主催である。

するおよそ 70 の団体			その母体である株式会社トゥルーカラーズは、カラーセラピストなど 25000 人以上の門下生を輩出しているが、門下生による共感覚を謳った詐欺・霊感商法や、門下生が主宰または幹部を務めるカルト宗教による被害報告が本会に相次いでおり、本会による調査の結果、「共感覚の訓練によって人生が幸せになる、死後の世界で幸せになれる、婚期が近づく、性生活が充実する」などの効能を謳っている有料の共感覚セラピーなどは、学術的根拠があるとは到底認められず、大学等の共感覚研究機関において取り上げる意義があるとは考えられない。 TC カラーセラピーそのものの効能に根本的な疑義があると見るほかない。
倍音＆共感覚セラピスト シンクロニシティを引き寄せる共感覚 共感覚マスター講座・体験セミナーなど	和泉 貴子	http://www.izumitakako.jp/	本会による調査の結果、ラッキーチャンスに気づきやすくなるなどの効能を謳っている有料の共感覚講座などは、学術的根拠があるとは到底認められず、大学等の共感覚研究機関において取り上げる意義があるとは考えられない。 また、「倍音＆共感覚セラピスト」は自称であって、このような資格は存在しない。
宗教法人　幸福の科学 幸福の科学出版株式会社 『なぜ、その商品がほしくなるの	総裁　大川隆法 （「エル・カンターレ」を称する） 左記の書籍の著	団体公式サイト http://happy-science.jp/ 出版社公式サイト https://www.irhpress.co.jp/	大学教授やマーケティング関連研究所の所長などを歴任した著者平林千春が、左記の書籍の「第 4 章　五感ブランディングの時代」において共感覚を大きく取り上げており、共感覚の解説そのものには大きな誤謬は見られない。

か』 ・著者　　平林千春 ・定価　　1,512 円(税込) ・四六判 ・発刊元　　幸福の科学出版 ・ISBN　　978-4-86395-203-4 ・発刊日　　2012-05-30 第 4 章 五感ブランディングの時代 ・人々は五感で“世界”を感じている ・五感が融合した〝共感覚〟の世界	者　平林千春 （東北芸術工科大学デザイン工学部企画構想学科教授、（株）コミュニケーション・システム研究所代表取締役所長。快マーケティング研究会主宰。）	左記の書籍の紹介ページ https://www.irhpress.co.jp/products/detail.php?product_id=761	しかしながら、この書籍は宗教法人幸福の科学及びその総裁である大川隆法と関係の深い幸福の科学出版から出版されており、この出版社の書籍の読者には幸福の科学信者が多いためか、左記の書籍を読んだ信者から、「真の共感覚者は、仏陀の生まれ変わりであるエル・カンターレ大川隆法であり、世の中の共感覚者たちは不完全な存在である」などといった主張が、本会宛に届いている。 これら信者の主張は、あらゆる学問的観点から見て、取り上げる意義の全くない主張であり、信教の自由の保証の問題とは全く別個に、共感覚者コミュニティから排除すべき盲信であると本会は考える。 ただし、総裁大川隆法自身がこの書籍の存在及びその内容、共感覚の定義、信者のこれらの行動等について知識を有しているか否かは、不明のままである。 また本会は、大学等の共感覚研究の場に極端な新宗教的信念に基づいて行動する教員・研究者等が送り込まれないよう監視することが、我々共感覚者の使命であると考える。
共感覚セラピスト紗枝		http://ameblo.jp/nyon38/	本会による調査の結果、共感覚でソウルカラーを伝えるなどの効能を謳っている有料の共感覚セラピーなどは、学術的根拠があるとは到底認められず、大学等の共感覚研究機関において取り上げる意義があるとは考えられない。 また、「共感覚セラピスト」は自称であって、このよう

			な資格は存在しない。
チャネリング・カラーセラピースクール Color Town（カラータウン）	井間 裕子	http://www.colortown-yuko.com/	本会による調査の結果、共感覚でエネルギーフィールドを認識できるなどの効能を謳っている有料のセラピーなどは、学術的根拠があるとは到底認められず、大学等の共感覚研究機関において取り上げる意義があるとは考えられない。
atelier [for me]	草木 裕子	http://forme-colour.jp/	本会による調査の結果、共感覚による効果でカラー・アロマ・ヒーリングをおこなうとする有料のセラピーなどは、学術的根拠があるとは到底認められず、大学等の共感覚研究機関において取り上げる意義があるとは考えられない。
atelier lirico｜アトリエ＊リリコ	lirico	http://www.lirico.jp/	本会による調査の結果、共感覚による有料のエナジー・ワークなどは、学術的根拠があるとは到底認められず、大学等の共感覚研究機関において取り上げる意義があるとは考えられない。

日本共感覚研究会

活動内容が懸念される共感覚関連セラピー等の名称例の一覧

2013 年 2 月 10 日　起筆、作成及び改訂継続の総会承認　2015 年 7 月 16 日　公開
2015 年 8 月 2 日　更新　2016 年 9 月 12 日　最終更新
総責任者　　日本共感覚研究会　会長　　岩崎　純一
掲載サイト　http://iwasakijunichi.net/
特設サイト「日本共感覚研究会」
厚生労働省、消費者庁、公正取引委員会、東京都に提供
全ての著作者の著作者人格権を侵害しない限り、CC BY-NC-ND 4.0

ここに掲げるリストは、以下のいずれかの活動内容に該当することが本会の調査において確認されたセラピー・講座・ヒーリング教室・カウンセリング・施術等の名称例の一覧である。

受講等をされる場合は一度参照されたい。

●別掲の「共感覚の学術的定義を著しく逸脱した事業を展開する日本国内の団体・個人事業主等に関する最新報告書」に掲げるセラピー団体をはじめとして、疑似的な共感覚や虚偽の共感覚の伝授・訓練などを標榜するセラピー団体等が開催している又は開催したことのあるセラピー等

●別掲の「麻薬・覚醒剤・危険ドラッグ・指定薬物等による共感覚の出現の知見の有無と当該薬物の国際条約及び世界各国・日本国の法令等における扱いとの対応表」に掲げる成分を含む飲料や食物を、主催者が超能力で共感覚を伝授すると謳って受講者に提供したり、主催者自らがこの対応表に掲げる成分を含む飲料や食物を摂取して共感覚者である旨を謳っている可能性が高いセラピー等

●その他、上記二者の両方を含む活動をおこなったり、活動内容が共感覚とは無関係であるなど（「共感覚セラピー」の内容が、実際には高額な受講料・金品の恐喝自体であったり、ダンス・モデル業・脱衣行為・ポルノ撮影・温泉旅行であったり、主催者の女性又は主催者の女性が用意した男性らとの性行為であるなど）するセラピー等

◆セラピー等の名称（前後を逆にしたり、複数の語を組み合わせたりしたものも該当する。）

共感覚セラピー

共感覚カラーセラピー

共感覚オーラセラピー

共感覚アロマテラピー（アロマセラピー）

共感覚エステ

共感覚セミナー

共感覚マスター

共感覚セッション

共感覚ヒーリング

共感覚リラクゼーション

共感覚カウンセリング

共感覚センセーション

共感覚レイキセラピー

共感覚ヒプノセラピー（催眠療法）

共感覚ワーク

共感覚ワークショップ

共感覚ソウルセラピー

共感覚トレーニング

共感覚リーディング

共感覚コンサルティング

共感覚アレンジメント

共感覚マッサージ

共感覚セックスセラピー

共感覚シンクロニシティ

共感覚シンクロセックス

第六部　疑似科学にまつわる懸念　― 疑似科学ではない超音波知覚と疑似科学である動物駆除超音波装置を例に ―

2014 年 8 月 16 日　起筆、公開
2017 年 11 月 16 日　最終更新
（2018 年 7 月 14 日追記：現在、岩崎の旧サイトの内容は『全集』に収録。）

【読者の皆様への再度のお願い】（2015 年 3 月 10 日　追記）

2015 年 3 月 9 日以降報道されている兵庫県洲本市での事件について、被疑者（本日時点）が国家や近所による電磁波攻撃の被害なるものを主にインターネット上で主張し、妄想性障害による通院歴があることが判明したことが影響してか、このブログ記事や他の特定のブログ記事へのアクセス数が急増しております。

また、以前より共感覚や超音波知覚をこういった電磁波攻撃の話題と結びつけるような内容のご連絡を多々頂いており、共感覚攻撃なるものによる犯人退治を依頼されたり、逆に共感覚攻撃なるものをやめるよう要求されたりしております。

共感覚者や超音波知覚者の感覚は、元よりこういった話題とは一切関係がなく、すでに神経科学などの分野で検証・研究されているもので、精神病理学上の統合失調症や妄想性障害とは全く異なります。

読者の皆様におかれましても、今一度、最低限の良識と学識をお持ちいただくよう強く求めます。

【注意勧告】当コミュニティが疑似科学団体や電磁波攻撃・テクノロジー犯罪被害者団体と友好関係にあるかのように紹介されている事例に対する注意勧告、および統合失調症や妄想性障害の既往歴・現病歴の確認のお願い
（「超音波知覚者コミュニティ東京」内）

↓　以下、追記前の本文

すでに分かっていらっしゃる方には、何だ今さらそんなことを書くのかと笑われそうなことを今から書くのですが、いわゆる疑似科学・オカルト科学にまつわる重要なことを書いておきたいと思います。

読む人が読むと笑うかもしれませんが、私が個人的に優先的に手助けしていきたい方々（統合失調症者など）のためにもまじめに書きますので、よろしくお願い致します。

私は、聴覚では聞こえない音域の超音波（自動ドアセンサーや動物駆除効果を謳う装置から発生している超音波など）が共感覚で見える（色で聞こえる）知覚を持っていたり（「超音波知覚」）、勝手ながら「超音波知覚者コミュニティ東京」なるミニサークルを作り、不定期で都内の超音波発生装置の設置場所を見つける散策をおこなったりしていますが、今でも超能力者やヒーリングカウンセラー、自己啓発セミナー講師などと間違われます。

超音波知覚者コミュニティ東京
http://iwasakijunichi.net/choonpa/

超音波知覚やモスキート音知覚に関するリンクのメモ
https://iwasakijunichi.net/iwasaki-j-blog/99760523.html

音域表と聴覚・共感覚（PDF）
http://iwasakijunichi.net/ronbun_ippan/onpa_chokaku_synaesthesia.pdf

実は私自身は、今の和製英語的な「オカルト」概念は好みませんが、神秘学・隠秘学としてのオカルティズムには関心がありますし、宗教についても正統派だけでなく秘教・密教も好きだったり、絵画についても象徴派・耽美派・オカルティズム絵画が好きだったりと、異端派・アウトサイダー的な趣味が多いわけですが、今から書こうとすることは、それともまた違っています。

普段はメールでのご質問やご相談が中心ですが、最近は掲示板にも、ご相談というか、私のこの知覚のサイトでの扱いに呼応したと見られるその人なりの精神的な叫びのような書き込みがありました。（「超音波テロの被害者」様の書き込み）

最近、私の超音波知覚や「超音波知覚者コミュニティ」が、超能力関連の掲示板などで紹介・リンクされたり、「岩崎純一さんという超能力者のサイトがおすすめです」といった推薦のされ方をしているのを見て、非常に気になるので、書いてみようと思います。

もちろん、それぞれの方々の色々な身体的・精神的な症状が収まって健康になれるよう願っているのは確かですし、メールや掲示板でもそう書いてはいますが、そういった誰にでも言えそうな挨拶程度の一般論で終わらせるのも無責任な気がしますし、正確さや冷静さを追求すべき物理学や宗教学や精神病理学の議論である以上、是正すべきところは是正すべきだと考えますので、書いておきます。

超音波知覚者コミュニティのページにも、執拗なくらいに色々と学術的な解説を書いてしまっていますので、全てお読みいただければ、リピーターとなって下さるご訪問者が必然的に、私と同様の知覚者やこの知覚に学術的に関心がある方に絞られるはずなのですが（あえてそれを狙って書いているのですが）、特に物理学的知識を要しない箇所も読まずに超能力セラピーなどをお求めになる方などがいらっしゃいますので、このブログでも一応

解説しておきます。

◆超音波と電磁波の混同

これが基本的には最も多い誤解ですが、私の超音波知覚はいわゆる「電磁波過敏症」や「化学物質過敏症」ではありません。電磁波過敏症や化学物質過敏症の存在が真実か虚偽かにかかわらず（私はこれらはあると考えていますが）、物理現象としての実体が異なるということです。

私が述べてみたいこと（いつも感じていること）は、超音波や電磁波を物理学的に理解できない人が駄目だということではなく、その分だけ簡単にカルト宗教や詐欺に引っかかりやすいということであり、「超音波と電磁波は異なる」ということをサイトの色々な箇所で書いているにもかかわらず、「あなた（岩崎さん）の能力は電磁波感知能力だ」といった主張が来る点に、本来あるべきルートを外れた懸念を感じるといった意味です。

◆オカルト科学であるものを真実であると信じる誤解
（超音波による動物駆除機器に効果がないことは検証済み）

まず、ヒトの超音波知覚はあり得ないとする誤解の前に、超音波がゴキブリやネズミなどの動物を撃退するという逆のオカルト的誤解があることを強調しておきたいと思います。

これについては、以前より「日本政府当局（公正取引委員会や消費者庁）や各超音波関連学会が、超音波による動物駆除効果に疑義を呈しており、実際に販売されている超音波発生機器を使った検証実験などによりその疑義が確証されたため、効果を捏造するなどの悪質な景品表示法違反や詐欺をおこなった事業者に対しては、公的に処分が下されている」事実をもって、啓蒙がなされていくほかないと思っています。

日本でも、この効果を信じた個人やスーパーマーケット事業者が、自宅の玄関先や店内に超音波機器を設置している光景をよく見かけますし、ネット上の掲示板や Yahoo!知恵袋でも、この効果を信じた人たちが過去の学術的知見を全く参照せずに議論していますが、私は、「ない効果をあると信じること」は、「（あることが証明されている）超音波知覚や共感覚など存在しないと信じること」と同様に、誤ったカルト宗教的信念だと思っています。

政府機関（公正取引委員会・消費者庁等）や科学者が注意勧告している超音波発生機器製造・販売業者の違法・悪質行為について
http://iwasakijunichi.net/choonpa/iho.html

超音波知覚やモスキート音知覚に関するリンクのメモ（ネット上の Q&A やまとめ、超音波発生装置に害虫除け効果が認められないことを検証した科学実験）
https://iwasakijunichi.net/iwasaki-j-blog/99760523.html

若者のたむろ防止用に設置している場合は、設置者側もそれを「音波・モスキート音による効果」と分かって設置しているので、それは意味があることになりますし、全く別の話題だということになります。

◆真実であるものをオカルト科学であると信じる誤解
（「超音波は鼓膜を通しては聞こえない」というだけで、「超音波はヒトにも知覚できる」）

私が扱っている超音波知覚（広義では共感覚の一種と見ることもできる）は、既存の神経科学・生物学・物理学・音声学の分野であり、確かに日本では研究が遅れており、海外でばかり研究が進展している分野ではありますが、私は「一般の人に見えない超常現象や天変地異が私には見える」と述べているのではありません。

むしろ、この超音波知覚のうち最もよく知られたものには、骨伝導に基づく骨導超音波があり、健常者だけでなく感音性難聴者にも超音波が聴覚として聞こえるため、医学的に応用されつつあるものです。ハーバード大やマサチューセッツ工科大が研究の最先端を担っていますが、日本でも産業技術総合研究所が骨導超音波の高度な技術を有しています。

◆電磁波盗聴・超音波盗聴・電磁波テロ・超音波テロなど（の存在未証明の犯罪・テロ行為）に関するご相談についての私見

上記のことと関連するというか、ほぼ同じことなのですが、 電磁波や超音波による犯罪・テロなるものについてのご相談も時々来ます。ネットでこれら「電磁波盗聴」などを検索すると、そのような被害を受けたと主張する人たちの相談や、そういう人たちを騙して盗聴防止機器を売りつける詐欺サイトなどが引っかかります。今回の掲示板への「超音波テロの被害者」様の書き込みも、そのような「テロ行為」の告発の一環だと思われます。

電磁波や超音波を用いた犯罪・テロ行為については、これらを信じる人たちを最初から否定して統合失調症の疑いをかける精神科医もいることはいますが、まずは現実に行われている電磁波・超音波による犯罪・テロの研究について、書いておくことにします。

私も個人的には、世界で行われている信じがたい犯罪技術、軍事・テロ技術研究やそれらについての論文・裏話などに興味があるのは確かです。

例えば、超音波を頭蓋骨・脳内に直接照射する軍事・テロ技術の分野では、米軍や米国

防総省の国防高等研究計画局（DARPA）などが共同開発 している、経頭蓋超音波（パルス波）を利用した兵士の士気のコントロール技術、兵士への情報伝達技術や、そういった技術のテロリストらの自爆願望の鼓舞への転用などについては、私も注目してきました。

DARPA（兵士の脳に埋め込む超音波情報受信装置や超音波マインドコントロールデバイスを開発している。）
http://www.darpa.mil/default.aspx

また、電磁波聴覚については、例えば軍事レーダーのパルス波が起こすフレイ効果によって脳内で発生するマイクロ波聴覚の研究などを追っています。米軍・米諜報機関・WHO・米国科学者連盟などの米国の機関を中心に、軍事目的での研究（とりわけ電子戦での利用を目的とした研究）が続けられています。

マイクロ波聴覚効果（フレイ効果・Microwave auditory effect）
http://en.wikipedia.org/wiki/Microwave_auditory_effect

脳内音声兵器
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%84%B3%E5%86%85%E9%9F%B3%E5%A3%B0%E5%85%B5%E5%99%A8

電磁波聴覚に関するツイート
http://iwasakijunichi.net/choonpa/new.html

ただし、これは「すでにある技術研究」をはたから見て楽しんで勉強しているだけであり、「電磁波が聴覚で聞こえたり超音波が視覚で見えたりするはずがない」という信念のほうが非科学的・カルト宗教的信念であることになります。

ただし、既存の世界中の論文や検証実験データにないことを信じるかどうか、また自分がテロの被害を受けていると信じるかどうかといった話題は、残念ながらさらに別の分野のものだと言うほかないと思います。

電磁波や超音波による攻撃を受けていると主張し、なおかつ文面・文脈の全体にそれを盲目的に信じる傾向が見られる人については、やはり精神科を勧めることになります。統合失調症者に典型的に見られる思考奪取・思考伝播・思考化声などの妄想・幻聴の最も典型的な例が、この超音波・電磁波攻撃被害の主張となっています。

こうなると、現実の超音波や電磁波の研究とは全く関係がありませんので、精神病理学の分野となってしまいますし、私個人としては、統合失調症者は、学術上の知見を参照せずに超能力セラピーなどを求めて来られる方々よりも優先的に接したり手助けしたりした

い人たちです。

統合失調症
http://iwasakijunichi.net/seishin/togo.html

この記事へのコメント

迷惑コメントは、ブログ管理者として迷惑コメントの実態を探るため、あえて残しています。

【2017 年 11 月 16 日　追記】
削除することにしました。 Posted by 岩崎純一 at 2016 年 12 月 24 日 11:28